
幻想入りしたので普通に生活してみることにした

masakage

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想入りしたので普通に生活してみることにした

【著者名】

ZZマーク

【作者名】
m a s a k a g e

【あらすじ】

目が覚めたら森の中…典型的テンプレですね、わかります。幻想郷に迷い込み能力を手にした主人公は…とりあえず普通に生活することにした。シリアスなんて書けません、*どうどう*な日常を描いた*どうどう*な話です。

その1（前書き）

初投稿です。

ネタだけの ~~おお~~ ~~おお~~な駄文ですが
生温かい目で見守ってくださるとうれしいです

その1

目が覚めるとそこは、樹海でした
「ここは…どこだ？」

今森の中をさまよっている僕は高校に通うぐく一般の男の子
強いて違うところをあげるとすれば友人に

「お前は自分が一般人と思っていたのか？」って言われたことか

ナ一 名前は斎藤蓮

そんなわけで気が付いたら森の中にいたのだ

ふと見ると篝に一人の若い女の子が座っていた

ウホッ！ いい「スプレイヤー…

痛ッ そう思っていると突然その女の子は僕の見ている田の前で
手の何かに光を集め始めたのだ…！

「マスタースパーク！」

アッー！

田覚めたら民家にいた「知らない天井だ」と言えた俺は偉いと思つ

「田、覚ましたみたいだな…」

言葉の聞こえる方向に向くと俺をレーザーで吹き飛ばしたの女の子がいた。

許せる！（服装が）

「おれで体を起さないか体を異常に重いし何だこれ？」

「あんまり無理に動かない方がいいぜ、今は安静にしてな」

「そつする… 前に俺は斎藤蓮。お前は？」

「レンか、私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだぜ！」

「魔法使い……だと……」

「ああ、お前あまり見かけない服装だけどもしかして外来人か？」

「外来人つて何ぞ？」

「ああ……色々と説明が必要そうだな……」

というわけでここは幻想郷という地名だと魔法や妖怪が存在するトンデモ世界だとか

外の世界に出ることは難しいなど色々なことを聞いた。

やられたらしい。

「なるほど… テンション上がつてやた」

「お前危険性とか全く理解してないだろ、そして何故そんなに首を振る、ていうか安静にしろ」

「そりゃあこんなに面白そうな世界に来ることができないかと思わなかつたし、人生何があるかわからんね」

「こんな外来人はお前だけだと思つぜ……」

俺もそう思います。

「お前はどうして魔法の森にいたんだ?スキマ……不思議な穴にでも落ちたのか?」

「そんな穴があつたら入りたい……じゃなくて夜ベットで寝て目が覚めたらあの樹海にいました」

「なら外の世界で忘れられたとか」

「そんな薄いキャラじゃ あないつもつです」

「……だな」

やうじうと魔理沙は少し考える素振りを見せ

「とりあえず後で博麗神社に行くか、あいつなり色々知つてるだろ。送つてやるよ」

と言つた。何このいい人感動した、俺にレーザーを撃つたとは思えない

「何から何まですまないねえ魔理沙さん」

「それは言わない約束だぜ」

ノリのいい人でもあるようだ。

それにしても霧雨魔理沙、マリサか…ビックで聞いたことのある
ような気がするんだが…

まあそれよりも聞かなければならぬことがある

「とにかく魔理沙さんや」

「なんだ?」

「俺はビックでレーザーを撃たれたのしみつ?」

「何か失礼な」と考へてそうだったからだぜ」

何故ばれたり。

その1（後書き）

主人公は原作のことあんまり知りません

主人公の名前は適當、パツと思い浮かんだものを使いました
長文書けるようになりたいな：

その2（前書き）

原作キャラの口調が分からぬ…
違和感があつたら感想を頂けるとありがたいです。

その2

少し休むと体調が良くなつたので博麗神社とやらに向かう」となつた

魔理沙が「飛んで行くNE」と言つたので魔理沙に掴まつて簾に乗ることに

「うおおおおおおお飛んでる飛んでるーサラマンダーカツハーアーー！」

「まあ」の魔理沙様、スピードに關しては自信があるぜー！」

あつという間に神社に到着、博麗神社…聞いたことがあるよつな気がしないでもない

「さて、おーい靈夢ー！」

「うるわいわね…聞こえてるわよ。」

神社から出てきたのは紅白の脇…腋が見える巫女服を着た美少女
だった

「お茶飲むなら賽銭を…ん？その男は？」

「ん？ああ…斎藤蓮です。よろしく！」

「私は博麗靈夢、靈夢でいいわ。…この外来人が本日の要件？」

「おう…察しがいいな、といつ訳で紫に会わしてもういたいんだけど」

「私に言つたつて命えるとも限り」「ここにいるわよ…来たわね」

目がいつぱいある気持ちの悪い空間から出てきたのは八雲紫だらう

何故フルネームを知つてゐるかといつよつ靈夢の名を聞いて姿を見て思い出した

これは東方 project の世界だと。

友人が熱狂的ファンだつたし一次SSを読むのが好きな俺は少しぐらいは知つてゐる

二二 動画でもいつぱい動画あるしな、そして俺はおもわず叫んだ

「オリ主ketteーーー！」

「「「」？」」「

「おー紫さん！俺が何故ここにいるかはひとつでもいい！能力はあるのか能力は！」

「ちよつと落ち着いて…結論から言つてあるけど

「我が世の春が来たーー！」

「マスタースパーク！」

私はピチュつた。オリ主（笑）

「落ち着いたか？」

「はい」

目が覚めたら和室にいた、多分神社の中だろう。

「こんなにテンションの高い外来人は始めてよ……」

靈夢につられて思わず紫さんも苦笑い。まあテンションが上がる

のは仕方ないだろう
まさか自分が幻想入りするとは……友人が血の涙を流して嫉妬しそうだ

友人はよく「幻想入りしてえ……チルノたんをクンカクンカして（
「y」）とか言つてたなあ

と今は遠き友人に思いを馳せていると少々疲れた様子で紫さんは話し始めた

「残念ながら私にもどうして彼が幻想郷に迷い込んだかはわからな
いわ。

尤も能力を持つ以上幻想郷を出てもうつ訳にはいかないけどね」

「……で、彼の能力は何なの？」

「彼の能力……それは……」

俺の代わりに靈夢が聞いてくれたがヤバい、心の準備がまだ…アツー！

そして紫さんと口を開いた

「IJの世に存在する物を具現する程度の能力
空想上の物でなければ何でも好きな物を作り出せるわね」

「へえ～かなりいい能力じゃねえか！ってどうしたレンちゃんと
のテンションはどうした？」

「いや…IJは上げて落とされるパターンと思つてまして拍子抜け
しました」

魔理沙はやつぱりIJKはワケがわからんと呟いていた、IJK
は少しづつテンションが復活
さりそく試してみようと欲しいものをイメージ、すると手にはヤ
クトが…！ 早速飲む

「ふむ、やつぱり少量なのがいいよな、うん」

「何飲んでんだよ…私にもくれ」

とのことなので全員に配つてみた、結構好評だった。この能力便利そうダナー

能力の影響か少々疲れたが。

その後少しひ話をしたのち紫さんは帰つていった、忙しいらしいが靈夢の目を見るに多分嘘だ。

それはともかく人里に行くことにした。

靈夢にお礼を言い博麗神社を離れる。

そしてまた魔理沙が送つてくれるとのこと

さらに移動中「住むところに困つたら家に住んでもいいぜ」とも

言つてくれた

まあ俺の原作知識（笑）によると魔理沙にはヤンデレ彼女がいた氣がするので保留とさせてもらつたが…

申し訳なさが天元突破しそうなのでお礼どうすればいいか聞いてみると

「まあ楽しかつたし別に何もいらないぜ」

のこと、手軽にマスパ撃たなければ掘られてもいいレベルだろ
…「これは

「惚れてまうやわーー」とシャウトしたらマスパで撃墜、魔理沙は先に行つてしまつた。

結果、空から人里は見えていたので道もわかるし一人で歩いて行くことになつた。

どうしてこうなつた

その2（後書き）

主人公の能力はチートですか？ 最強物？ またまた御冗談をw
紫がただの説明キャラにしちゃつたのが反省点

セの3（前書き）

まだまだ出会い編
早く日常を戻したい...

その3

紆余曲折あつたが人里に到着、すると門には魔理沙と不思議な帽子をかぶつた銀髪の女性が待っていた。

あの人は誰だつたか…でもそれ以上にあの帽子はどうかぶついるのかが気になる。

まあそれよりもまずは魔理沙だ。

「魔理沙に対する評価が青天井だつたのにこの仕打ち、下方修正せざるを得ない」

「お前が変なこと叫ぶからだろ! が!」

「俺は思つたことを口にするタイプなんだ、自分に正直に生きていきたい」

「何いいこと言つたみたいな顔してんだよ」

「何があつたかは知らないが彼の今後を話しに来たんじゃなかつたのか?」

帽子さんの言つ通りなので従つことに

「E x a c t l y (その通りでござります) 僕の名前は斎藤蓮です」

「私の名前は上白沢慧音、この人里で寺小屋の教師をやつてゐる。早速だが村を案内しよつ」

「よろしくお願ひします、慧音さん」

「ああちょっと待った、慧音に聞いたらお前が暮らせる民家は余つてこないから私はもう帰るぜ」

「おう、今日はありがとなー今度魔理沙のところに遊びに行くからー」

「瘴気があるからあまり無理するんじゃないぞー」と笑いながら魔理沙は帰つて行った

瘴気対策にガスマスクを着けて遊びに行くことじよつ。

「さて、お別れも済んだようだし行こつか

というわけで慧音さんにつれて行く、あー見してもうおうか、幻想郷の村とやらを！

（獣人案内中）

「…」れで一通り回つたな、どうだ？村の感想は

「これほどまでに普通の村とは思わなかつたです、幻想郷といふ名から期待してたのに落胆を隠せない

「君は結構失礼なやつだな」

慧音さんは少し顔が引きつつていて、一方俺は幻想をぶち壊され

た気分だ

まずはそのふざけた幻想を（こゝ

「まあ畠さん生き生きとしていて良い村ですけど」

「やついつ感想を言え…さて最後だな、こゝが君の家だ」

これから我が家となる家に到着、普通の家だつたが…フフフ俺の能力で魔改造してやるぜー

我が家のプランを練つてこると畠さんに

「といひで頼、勉学に自信はあるかい？」

と聞かれた、まあこゝ見えて高校レベルではあるが上のグループに食い込んでいた俺である

「少しごりいなら」と返すと「本当か!」と少し嬉しそうな返事が返ってきた。

学力を聞かれる、畠音は寺小屋の先生、そしてこの反応…これらが導く答えは一つ…！

「ではレン君、寺小屋で先生をしてみる気はないかい？」

予想通りの答えが来たつ…！

「バー口一 WWWWW」

「え、駄目なのか？」

「こやいやいや、むしろ教師をやりせんぐだせこ…ーーーとは嫌でござるー働きたいで」「ざるー」

と二一ト侍の逆のよつな」とを語りと壇んでOKをくれた
流石に二一トは困る、俺には世間の白い田に耐える精神力はない
ねんがんのじょくをてにいれたぞ！

慧音さんが帰った後、お楽しみの能力実験タイム！

俺の能力は野菜や肉（生きた牛は無理だった）なども具現可能で、
そしてちゃんと食べることができた。

自分の力口リーを使って具現するのではなく魔力とかそういうの
を使っているのか腹も膨れた

あれ？俺働かなくても生きていけるんじゃね？

そして漫画、ゲーム、テレビにコタツといった自分の部屋を彷彿
させるアイテムをじんどん具現

気が付いたら外の世界の俺の部屋みたいになっていた。
外も暗くなつていたし能力使いすぎで疲れたしもつ寝ることにした

魔改造なんて最初からなかつたんや！

その3（後書き）

住居確保、これだけですハイ

その4（前書き）

主人公の能力は名前だけ見るとチートですが戦闘に関すればチート（笑）です。理由は本文にて

どうせ戦闘描写なんてできないから強さなんて関係ないんですけどね。w

ふと眼を覚ますと慧音さんがいた、朝になつたので起こしに来てくれたらしい
朝美人に起こしてもらつとは何といつリア充、爆発はしないだろ
うがピチュンとはなりそつだ

「昨日はよく眠れたようだな、というかなんだこの部屋は…? 昨日の段階では普通の民家だったと記憶しているが…」

「能力で遊びすぎた、反省はしていない」

「能力持ちだつたのか?」

原作キャラの知つてゐる限り全員が能力持つていたから普通と思つて
いたが違つたようだ

能力のことを話すと「便利だな…」と言われた
使い手によつてはチート能力になり得るけども俺は魔力（といつ
ことにした）が少ないのですぐ魔力が尽きる。

俺の能力でマジックアイテムも作れるが
マジックアイテムに内包されている魔力へへへ（現実と言ひ名の
壁）へへへ俺の魔力

なので作れなかつた。

エ ヤの真似できる最強主人公物と思つていたのに…
まあ生きていいくえでこの上なく便利だからいいけども

「ところで慧音さんや、何故俺の家に?」

「村に来たばかりだから米も何もないだらつてだから私の家で朝食

を作ったから招待にな

すまない、昨日の時点で気付くべきだったのだが…」

「いやいや、能力でメシ作ったので大丈夫大丈夫、それよりわざわざありがと」

「構わないよ、じゃあ行こうか」

ということで慧音さんの家で朝食を頂きつつ俺の今日の予定について聞いた

今日は自由にしていいことなので魔理沙の家に遊びに行くことにした

「魔理沙～コホ～遊びに来たぞ～コホ～」

「レンか?何で声にコホーかかってるんだ…つわああああああマス

タースパーク！」

「グハア！」

瘴気対策にガスマスクをつけていたのだが、『ご覧のありさまだよー。

「全くびっくりさせるんじゃねえぜ…新手の妖怪と思つたじゃねえか」

「これが無いと瘴気で俺の寿命がマツハなんだが」

「心臓に悪いからほかの手段を…いやまた変なの持つてこられても困るからこれでいい

それにしてもお前昨日より頑丈になつてないか？何でマスタースパークくらつてすぐ復活してるんだよ？

初めて撃つた時は3時間ぐらい気絶…いや一般人が耐えれるのがおかしいんだが

「それほどの威力なのか…魔理沙さんの愛の形は激しそうだぜ！」

「ファイナルマスター・スパークいつてみるか？ チリひとつ残さず、消滅させてやる…！」

魔理沙が冥王に見えてきたので音速で土下座した
きつとあれだな、マスパ撃つときに使つてる八角形のやつは次元
連結システムなんだろうな

「忘れてた、遊びに来たのもあるけど今日は昼飯を御馳走しに来た

んだった

これで済むとは思つてないけど少しすつ恩返しを…」

「別にあれぐら^イに氣にしなくていいんだけどな、まあ貰^うえる物は貰う主義だし頂^くぜ

ていうかお前料理できるのか？イメージ的に不安なんだが

「今の^ご時世男が料理なんて普通だぞ、今から作ればちょうど毎日になるだろ^うじ作るわ

キッチン借りる^う〜」「

「構^くわないぜ」と魔理沙から許可は貰^うつたので適当に和風な料理を作つてみた

材料はメイドイン俺

「へえ～結構上手いな、この魚初めて食つたけど美味しい」

「それは何だつたっけ？漁師じゃないから名前はわからん

とりあえずこらへんは海の魚は獲れなさそだから海の魚をチヨイスした

……ちくしょうオリ主なう^うで餌付けフラグなんだが俺にはまだまだ実力不足だつたか

「今餌付けとかいう不穏なセリフが聞こえたんだが、氣のせいだよな？」

「お前は一体何を言つてる^ごめん、その八角形のこつちに向けないで」

何故だろ？「ハーレム」とかのタグが付く気がしない
俺はどこで選択肢を間違えた？ ハツ俺はもしかしてモブキャラ
なのか？

現実に絶望しつつ食事を済ませた俺だった

「へえ～魔理沙ってキノコパワーで魔法使つてたのかー キノコで
パワーアップつてどつかの配管工みてえ」

「パワーアップつてわけじゃないんだがな、外の世界には魔法とか
無いんだろう？」

なのにキノコでパワーアップつてどつかことだ？・ドーピングか
？

「あ、いやゲームのキャラでマオ…リオだと…マリサとマ
リ…そしてキノコ…」

俺は恐ろしいことに気づいてしまったのではないか？ 任堂
に消されてしまふかもしれん！」

「いきなりどうした？ つておい！……帰つちまつたぜ、やっぱ
あいつは訳がわからん」

マスクを装備し人里へBダッシュした、しかし冷静に考えてみると任天は黒い話は無かつた気がする

消されるのはネズミがいる夢の国だったな ハハツ（甲高い声）
安心して人里に帰つた俺は不審者扱いをされ慧音さんに頭突きを

された

「そんな怪しい覆面をつけるんじゃない！」

ガスマスクとるの忘れてた…

その4（後書き）

ちなみに主の好きな東方キャラはお空地靈殿ことひづりじゅうじを行かそつ…

斎藤蓮の一日は早い、今日も慧音に起しあれ慧音の家で朝食を食べる

「LJの漬物つまし、早起きしたから飯がつまごー。」

「私が起こしたんだがな、お前の部屋には外の世界の機械がたくさんあるんだろう?」

「その中に田覚まし時計は無いのか?」

「LJの世界でオーバーテクノロジーなアイテムは使つてはいけないと思つんだ…

ええ電源が無いからどういつ言ひて訳をしてるわけじゃありませんよ?はい」

「レン知つてるか? そういうのを能力の無駄遣いと言つんだ」

「褒めるなよ「褒めてない」…とLJのだけ一ねは何で田覚まし時計を知つてるんだ?」

「河童が作った物の中であつたからな、よく考えればお前の家は河童にとつて宝の山かもしれん」

「河童が我が家に来るフラグが立つたんですね、わかります」

適当な会話をしつつ朝食を食べ終え寺小屋へ、今日は俺の初仕事である

慧音にサポートしてもらいつつ授業を行つ予定だったが

「慧音先生！ウチの主人が倒れて！」

「何！わかつた診療所へ向かおつ。ああでもレンが……」

「けーね、授業の資料とかある？」

「ああ、あることにはあるが……」

「なら大丈夫だつて、ちょっと見してみ……これだけ丁寧に書いてくれてたら大丈夫だろ」

「そつか、だつたらレン任せたぞー。」

「子供たちは俺に任せろーバリバリ」

「やめてーつて何してくれんんだお前はーー。」

「これ能力で作った偽物……」めん冗談が過ぎた頭突きは勘弁して

「そう思うなら最初からするんじやないー。」

「あべしー。」

「…………不安だ」

しかし普通の授業をするといつのも味気ない、だから俺は
という訳で俺の初授業はぶつつけ本番となつた

え？この計算がわからないか…何でそこで謹めるんだよそこで！
諦めんなよ…諦めんなよ…ビッシュトナリでやめるんだ！？
そこで…

もう少し頑張ってみてみろよ！ダメダメダメダメ諦めたら、周りのことと思えよ！応援してる人たちのこと思つてみろつて……あともうひとつのことうなんだから。

お前ならできる……きっと解ける……

たから川をNeeve n
8.1
m
p-1

炎の妖精をリスペクトした授業をすることにしてみた。
今の子供に足りないものは熱さだと思うんだ…

俺
に
つ
い
て
こ
い
！

「「「「「「「レン先生ーーー」」」」」」」」

「私のいない間に何があった！！」

「けーね、今いイト「なんだから邪魔すんなよ...」

「どうしてお前は一日で子供たちと私以上の信頼関係を結んでいるんだ…」

慧音が「……」となつてた、パネエ……修造さんマジパネエ……
慧音に「一体何を教えたんだ？」と聞かれたので「熱血努力友情

！」と答えたなら釈然としない感じで納得していた。将来的には「あいつらはワシが育てた」って言えたらしいな

「オマケ」

「はあ…」

「ん？ どうした慧音、ため息なんかついて」

「妹紅か… 私は教師に向いていなかつたのだろうか…」

「ちよ、どうした！ 何があつたんだ！」

「フフフ… わずか一日で子供たちの心を虜掴みするし、子供たちの勉強意欲が上がつてゐるし… もうレンにすべての授業を任せた方がいいかもしけんな…」

「重症だ… きよ今日は飲まないか？ 夜雀の屋台がおいしこうて噂があつてな」

「そうだな、今日は飲みたい…」

翌日慧音が起こしに来なかつたので何があつたのかと慧音の家に行つてみれば、一日酔いで寝込んでいた。

「ハクトクつて病を退ける存在とかじやなかつたつけ？」

医者の不養生ならぬハクタクの不養生だな、今日も俺が授業して
おぐぞー

「うう…うわーん！」

「涙拭く…今日はまゆくべりすれぱーーと涙つみ…バーとあー…今日
は俺が晩御飯、駆走してやんよー」

からかおうと思ったがそこそこ気はななかつたのでやめた。きっと疲れているんだろうな

慧音の負担を減らすために明日も俺が授業しようと心に決めた。

セの5（後書き）

慧音さんを泣かせてしまったレンであった
「めさんさい石投げないで

修造ネタを書いているといひまで熱くなつてくるから困る

慧音が一日酔いでダウンした翌日、今日も俺が行くと言つたところ
「おつお前はまだ幻想郷に来て四日目だ、だから人里をゆっくり見て回るといい！
まだ地理を把握してないだろ？人々と友好を築くのも大切だからな！」

と言われたので一日分の給料をもらい人里をぶらぶらと散策することになった

慧音に言われて気付いたが俺幻想郷に来てまだ四日目だったんだな
考え方をしながらぶらぶらとしていると何かに顔を突っ込んでしまった

レンはめのまえがまっしろになつた！

「何が起つた！新手のスタンド能力か！？」

「ああつ申し訳ございません！私の半靈がご迷惑を」

視界が回復したので周りを見回してみると大量の荷物を持ったおかげの侍ガールがいた
てか荷物が全部食材だ、まとめて買つているのだろうか？

「いや大丈夫…すうい荷物だけまとめて買い？」

「いえ……一日分です」

「…ああ大家族なんだな！」

「これはほぼ主の一人分です…」

「ふむ、俺の言語中枢がおかしくなったのだろうか？」

「正常です…ハア」

やべえ…侍ガールの目が死んでる。」こは話題を変えねば

「俺の名前は斎藤蓮、四日前に幻想入りしたばかりの新入りなんだ」

「そりで見たことのないはずだ…

私の名前は魂魄妖夢、白玉楼で庭師兼警護役をさせてもらつてます」

「ずっと気になっていたんだけどこの雲みたいなやつは何？」

「私は半人半靈でしてこれは私の半靈です。この人里では珍しいでしょうね」

「ほうほう、半分獣人に続いて半分幽靈とな？幻想郷マジ幻想郷だな」

「獣人…上白沢さんのことですね、あつ早く帰らなきや！幽々子様

「怒られてしまつ」

「あらり、なんか引きとめちやつて『ゴメンな』

「いえいえ、ではよつなり斎藤さん」

「レンでいいぞ、俺も魂魄さんなんて言つてから妖夢つて言わせてもらつ」

「じゃあレンさんよつな」

妖夢は帰つていつた、なかなか思い出せなかつたが彼女も原作キヤラだつたと思つ
確か腹ペコ姫の従者だつたつけ？彼女の家のエンゲル係数はビツ
なつてゐるんだろう…

場面は変わつてここは博麗神社

「このはありがとー」と言いながらお賽錢を入れたりすゞい勢いで巫女が飛んできた

「お賽錢！？え、マジで？」

「靈夢久しぶり、この前はありがとつなー」

「アンタは…この前の外来人ね」

「レンだ、暇なので遊びに来たぜー」

「遊びにって…まあお賽銭入れてくれたしお茶ぐらいは入れてあげるわ」

「お賽銭入れていなかつたりどつなつてたんだ?」

「水を出していたわ」

「田湯ですかうなかつた

「畳畳畳、果てしなく和風だな。たまには洋風の部屋が恋しくなつてきた」

「だつたら紅魔館に行けば?魔理沙に頼んだら連れて行つてくれるかもね」

「ああ吸血鬼がいる屋敷だつけ?」

「そ、うよ、もしかして吸血鬼が怖くて行けなかつたりするのかしら」

「オラなんだかワクワクしてきたぞ!」

「…そ、ういえばあんたは一般人じゃなかつたわね」

「む、この一般といつ字を体現したような存在だといつのに失礼な

「見た目なら一般と認めるけど中身は一般と認めない」

「解せぬ……腹減つてきたな、飯俺が作つてやんよー。」

「唐突ね……でもとっくに材料切れてるわよ?」

「おまつじゅうやって生きてきたんだよ…」

「…根性とガツツかしら?」

「それは同じ意味です。まあ能力で材料ぐらい作れるから心配」無用なんだなこれが」

「人を助けるつて素晴らしいことだったのね、初めて知ったわ!」

お? 今度こそ餌付けフラグ来たんじゃね?

全國のく靈夢は俺の嫁♪とか言つてる人ざまあ WWWWW

「またか歩く食糧庫を見つけるなんて!」

フラグ…立つたよな?…うん

昼飯を食つて帰ろうとしたところ「食べ物を補充してくれない?」と言わされたので能力を使うはめになつた。

俺はオリ主なんだからもうフラグは立つてるだろ!

感想欄とかで「うはwwwもうwwwお前らwww結婚しちゃえよwww」とか書き込まれてるのも時間の問題だな(キリッ

おかしいな…疲れたのに充実感が全く湧かないんだが…

その6（後書き）

ポケモン白が面白くて困る

今更だけど主人公は料理好き…という設定ですw

前回のあらすじ

レン「そつだ紅魔館行こい」

という訳で午後の予定は紅魔館に突撃することにした。まずは靈夢の言つとおり魔理沙の家へ向かつゝすると

「お前も運がいいな、私も今からあつちに用事があるから送つてやるよ」

「（）都合主義だよー やつたね たえちゃん！」

「… 何でクマの人形に話しかけてるんだ？」

「良い能力を手にしたので元ネタを再現しようかと」

「そろそろお前の変人っぷりに慣れたな、じゃあそつぞと行こい」せ

「靈夢といい魔理沙といい…俺は一般人だと何度言わせねば

「早く後ろに乗れ、置いてくぜ」

俺はショボーンとしながら後ろに乗つた。

それにしても魔理沙は速い、あつという間に着いた。
魔理沙は図書館の方に用があると言つて先に行つてしまつた。
……初見さんが紅魔館に入れるのだろうか？
とりあえず門番がいたので話してみることに

stage 1 門番

「もしも～し、お邪魔して大丈夫ですかー？」

「……ணண」

「…よし、OK！」

結構あっけなく入れた、さあ次は屋敷の中だ

「しんにゅうしゃだー！」

stage 2 妖精メイド

「侵入者じゃないよ？本当に？」

「じゃあなになの？」

「ただ遊びに来ただけなんだ、お仕事お疲れ様、飴ちゃんをやひつ

すると妖精メイドは喜んで戻つて行つた。

なんだろう…心が暖かくなつた。

物理的法則を無視した広さを持つ屋敷を散策していくと地下へ進める階段があつた。

何といふかヤバい感じがする。

俺の本能が警鐘を鳴らしている感じだ。

「何だー？」の階段は！？とにかく入つてみよひつせー。

まあ入るんですけどね。

stage EX フランドール・スカーレット
stage EX フランドール・スカーレット

「だれ？」

「わたしです」

「！？」

「俺の名前は斎藤蓮、君は？」

「フラン、フランドール・スカーレットだよ。ねえレン、私と遊ぼうよー！」

「私は一向に構わんッ！……で何するんだ？」

「弾幕」

「……スマン、弾幕」

「え、知らないの？」

という訳でフランに弾幕について教えてもらつた。そういうえば東方つてシユーティングゲームだったな。

当然魔力が微々たるものしかない俺には弾幕を作れず能力で作つたものを飛ばせばいいんじゃね？と思つたが飛ばすことが出来なかつた。加えて空も飛べなかつた。

「駄目だつたねー」

「…正直そういう気はしてたんだよ、最強オリ主でないといつてはすぐ気がついたし。

でも、でもツツツツツー空ぐらいは飛びたかつたなあ。」

「ここに来たから強いと思つてたのに…」ビリしてレンは紅魔館に来たの？

「暇だつたので遊びに来た」

「…レンって変わつてるね」

「よくやつ言われるが…俺は認めない！」

「ところでフランはどうして地下にいるん…ああ吸血鬼だから日の光が嫌なのか」

「…そだから地下にいるわけじゃないよ」

フランはポシポシと自分のことを話し始めた、そしてその中に見過じせなごことがあった

「495年間地下に閉じ込められていただと…つまりフランは学校に行つてないのか！」

「氣になつた点そこなんだ…私の能力怖くないの？」

「紙装甲の俺から見たら一撃必殺も弾幕一つも変わらんぜー。」

「H.P.5の俺に」メラが来ようがザキを来ようが一緒である。

「…フフッ、やっぱりレンは変だよ」

「うるせえやー、ところでフラン寺小屋に来ないか？俺教師やつてるんだが外来人として義務教育受けてないのは見過じせない」

「でも私が行つたら皆怖がるよーそれに吸血鬼は日の光に弱いから外に出れないし…」

「俺教育が進んでる我が教室でそれはないな、問題は日の光か…お

？」

「」の時レンに電流走る…！

「フラン、失敗したら痛いが実験につきあつてくれないか？もしかしたらこの問題どうにかなるかも」

「本当に…？ だつたらちよつとべりいは頑張るよー。」

「うわけで玄関に移動したのだが…

「暗いな」

「暗いね」

外はすっかり暗くなっていた、こうなるともつ実験できない。

「う～む、これじゃあ無理だな…仕方ないフラン！ 明日また来て大丈夫か？」

「うん！ じゃあバイバイ！」

「おつまた明日な」

「魔理沙――！俺だ――――家に送つてくれ――！」

魔理沙はもう帰ったようだ、俺は一人とぼとぼと家路につき帰りが遅いと慧音に大目玉を喰らつたのであった、まる。

その7（後書き）

なんというかフランがフランらしくない感じが… 猛反省
キャラを殺さず一次SUSを書いてる人を尊敬せざるを得ない

セの8（前書き）

多分ほのほのとした一話
安西先生… もうとほつちやけたいです…

フランと約束したので今日も紅魔館に行くことに一日連続で教師を休むのはどうつかと思つたが慧音はすんなり許可をくれた。

ついでに家庭の事情で寺小屋に行けなかつた子がいるから行かせてやりたいと頼んでみたところむしろ連れてきてくれと黙つてくれた。

慧音…本当に良い人だよ…

時間をかけて紅魔館に到達、やつぱり遠い
どうにか早く移動できる手段はないかと考えながら門を通る
相変わらず門番さんは寝ていた
もつ門番じやなくて案山子でいいんじゃないかな…

「こんな警備で大丈夫か？」

「大丈夫よ、問題無いわ」

「ふざやあああああ！」

気がつけば門番さんの頭にナイフが刺さつており後ろを振り返る
とメイドさんがいた。

元ネタを知らなかつたら素で「ありのまま」（「」）になつただ
けい。

「斎藤蓮様ですね、我が主レミリア・スカーレット様があなたに話
があるとおっしゃつております」

「つかう ガチメイドだ…道わからんいで案内お願ひします」

「無論そのつもつで」*アゼコ*ます

「あなたが斎藤蓮ね」

メイドさんに案内された部屋に幼い…彼女はいた。

自信に満ちた不敵な笑み

優雅にモーニングティを楽しむその姿

溢れ出るカリスマ

まあ俺が何を言いたいかと言つと

「寝ぐせのせいで見事にカリスマブレイクしてゐるな」

「え？ わつ咲夜…！」

「承知しております」

見事な手際でわつきのメイドさん…十六夜咲夜さんはレコアの寝癖を直した

てか恥ずかしがるレコアを横田にメイドさんは恍惚の顔で寝癖を直していた

わざと寝癖残していたんじゃないだろうか……

「「ほん……あなたが斎藤蓮ね」

「ティク2ですか、「ほん……そただけビセツサマレニア・スカーレットで違ひない?」

「そ、うよ、ふーんもう行つていいわ」

「え、要件無いの?」

「フランと普通に会話をしていた人間を見てみたいと思つただけよ。フランを寺小屋に行かせたいって事なら好きにして構わないわ。能力であなた越しにフランを覗いてみたらフランは笑つてたしね」

「さよか、だつたら遠慮なくフランを寺小屋に通わせるぜー」

「でも一応釘を刺しておくわ、フランを泣かせたら死ぬより辛い目に会つと肝に銘じておきなさい」

「レミリアお前……口元にクッキーの屑が無ければ最高にカリスマ溢れてたな」

「ちよーーえ?」

「お嬢様、御顔をこちらに

……私が舐め取つて差し上げます」

「ええ、おねえ…こやこやこや待て！」

「早速フランのところに行つてくるぜ、じゃあ…ゆづくつしていってね！」

「

扉を閉めるときレミコアの声が聞こえた気がしたがそんなことはなかつたぜ！」

場面は進んでここには寺小屋

実験に成功したのでフランを連れてきたのだ。
え、実験内容？日焼け止めクリーム塗つただけだよ。言わせんな、
恥ずかしい。

「けーね、この子が家庭の事情で学校に行けなかつた子だ。フラン、自己紹介

「フランドール・スカーレットです。これからよろしくお願ひします！」

「……れん、ちよつとこつちにこい

「フラン、ちよつと待つてな……何だ？慧音、何か用か？」

「こ」の禍々しい妖氣から嫌な予感はしていたがフランドールとは聞いてないぞ！」

何で真昼間に外に出て平氣なのかとかあいつは495歳で子供じゃないとか突つ込みどころは色々あるが…私は人里の守護者だ、彼女のような危険な存在を人里に、ましてや寺小屋に通わせるなど…」

「先生が生徒を選び好みするなど言語道断！それにお前の言質は取つてんだ、問題はない」

「お前は詐欺師か！」

「まあまあ、話してみたら結構いい子だぞ？噂で人を判断したら駄目だぜ」

「…レンがそこまで言つない、まあ寺小屋に通わせるぐらいこは認めよ」

しかし…お前がちゃんと責任を持つことだ、いいな…」

「流石けーね！話がわかるウーよし…フリーハン…教室行くぞー！」

許可も貰つたのでフランを教室に連れてこき転入生だと生徒たちに説明した

それにも流石は我が生徒、フランが吸血鬼といふことを言っても問題なかつたぜ！

むしろ

「フランちゃんつていうんだ、かわいいなー私と友達にならつよー。なんだ？」

「吸血鬼って太陽が弱点じゃないの？ああつー頑張つて克服したんだね！す”ーい」

「えーと…レンーちょっと助けてー。」

「ん～まあ転校生の通過儀礼みたいなもんだ、諦めれ」

パワフルな生徒たちに質問攻めを受けていた
この光景を見て慧音もちょっと安心したようである
特にオチもない良い一日でしたとさ。

その8（後書き）

フラン生徒になるの巻
ノープランだから次を書くのが辛い…

その9（前書き）

圧倒的…圧倒的更新の遅れ…
敬意…他の作者様達の更新速度につ…

フランが寺小屋に編入してから数日、今日も幻想郷は平和です。慧音はフランに対する警戒を解いて普通に授業をしている。今日は慧音が教師をやっているのでつまり暇なのである

「ああ暇い暇い、暇すぎて死にそうだ」

「それは丁度良かった。斎藤蓮さん、あなたを取材しに来ました!」

声が聞こえたので玄関を見ると黒い羽根が生えた女の子がいた。これはあれだ…このキャラの名前は…

「確か射命丸さんだっけ?」

「あやや、知つていらっしゃいましたか。まあ一応自己紹介させてもらいますね。」

清く正しい射命丸、幻想郷で文々。新聞を書かせてもらつてます。

「

「ああそつそう新聞書いてる人だっけ。俺は斎藤蓮な、まあとりあえずあがりなよお。お茶入れるから」

「お使いありがとうございます、しかし今日はもう一軒行きたいので長居するわけにはいかないのですよ」

「もう一軒? ネタ? あつたんだ、どんなネタ?」

「そりゃあフランドール・スカーレットを寺小屋に入れた噂の熱血

教師の事ですかー。」

「それ俺な

「本当にですかー。あややややや、それは手間が省けてよかつたでー。」

「つまりネタは一つとも俺に関する事なんだから、面倒でもいいだ
な、甘いの嫌いか? 嫌いだったら煎餅出すけど」

「甘いのでお願いしますか」

「ふむふむ、巫女の子はかくあるべきだな。どつかの巫女と魔法使いは
煎餅って言つたけど」

「ふむふむ、靈夢たこと魔理沙さん認識あり……と、まあ取材を始めま
しよつかー。めずらしい不思議な部屋から……」

「質問だけでもいいので時間を使わせるとは、ブン屋恐るべし」

「本日はどうもあつがとついでございましたー。」

長かつた取材も終了し気付けば毎も過ぎていた。

射命丸も帰るつとした時、我が家に珍しい客が来た

「レン二ルー？」

「ん？ フランか。 どした？ 遊びに来たのか？」

「う～ん今日は魔理沙が弾幕ごっこしてくれる約束があるから…いや
じゃなくてあの塗り薬が欲しいの。 帰る途中で効果切れそうだし」

「さよか、 だつたら俺がフランの肌と重ひの肌に塗りつけてやるね
！ たまにロココンもいいよねー！」

「うふー…あつがとつー！」

「と懸つたけどフランが無垢すぎて俺には無理だつたぜー。」めんな
フラン…後は…任せた…ぞ… 射命丸さん」

「リリで私に振るのですか！？ く噂の教師実はロココンだった…！
^とこう記事が書けると思つたのですが残念です
…とこう訳なのですが構いませんか？ フランドールさん？」

「ここ…」

「…弾幕ごっこか、 見たことないな

フラン、 弹幕ごっこやりつを見てみたいから俺も連れて行つて
くれないか？」

「別にいいけど危ないよ？」

「俺には補正がかかつてるので大丈夫です、魔理沙のマスパは何回かくらつたことあるけどすぐ復活したぜ！」

フランは「す”ー”とつぶやきこちらを…やめて！…そんな綺麗な目で俺を見ないで！

多分魔理沙が手加減してるだけと思つからー

「目がチカチカする…」

「大丈夫ですか？」

紅魔館近辺の森にてフランVS魔理沙、友人は「東方の弾幕は芸術（キリツ）とか言つていたがそんなことはなかつたぜ…でもドラゴンボールみたいな派手な戦闘で見”こたえがあり良しそう”ことに

お茶を啜りながら弾幕”こ”を眺めてました。

「…お茶飲みながら戦闘を見るつてどうなんだり”こ”…」

「まあ変でしきうね」

認めたくないが俺は変人だつたようだ

その9（後書き）

ポケモンBWって面白いですよね
すみません更新遅いのそのせいです

その10（前書き）

シリアル注意
キャラ崩壊注意
ほのぼの出来てないので注意

幻想郷に住み始めて自分も結構馴染めていると思う。
毎日が楽しく充実している。

しかし、自分は馬鹿だった

人でありながら人外のような力を持つ者、妖怪、吸血鬼、魔女
漫画の世界のような力を持つたものが蔓延る幻想郷にいながら本
当の意味の危険には遭遇せず

自分はどこかでここを安全な場所とでも思っていたのだろう。
今日も何も考えず魔理沙の家に遊びに行くことにした

くだらないことを話しのんびり一日を過ごそうと思いながら魔理
沙の家に到着

いつも通りの日常が広がると思つていた

もう一度言うが自分は馬鹿だった

俺は今とある人物のせいで人生初めて命の危機にさらされている

「あなたが魔理沙の友達？男友達なんて必要ないわ…消えて」

そう…アリス・マーガロイドのせいで

神は言つている…ここで死ぬ定めではないと…

～巻き戻し中～

「マンダムー！何か未来で恐ろしいことが起つてこた気がする」

魔理沙の白毛前なう。いつも通りドアをイード...ノックしようと
思つたが第六感が警鐘を鳴らしてこる

フランの時とは違う純粹なる恐怖、それを今ビシリシと感じて
今日は引き返して靈夢の所に行こうと思つたその時

「気配があつた来たけどレンジやねえか、家の前で突つ立つてどう
したんだ？」

「オウ...ジー...ザス」

「何とこい」とじょい、魔理沙が出迎えてくれたよ

「どうした？顔色悪いけど...つてお前ガスマスク着け忘れてるぞー...
それで体調悪いんだな、ちょっと家で休んでけ」

「ア？いやちよっと...家に誰か居たりします？」

「アリスがいるけど...まあ別にいいだろ、それよりゆっくりしたま
うがいい

魔法の森のキノコをあまり舐めない方がいいぜ」

「魔理沙...お前が優しすぎて俺今日死んじゃつかも」

何言つてんだと魔理沙は笑つてゐるが俺はどこか表情がぎこちない
そしてリビングにいたよ…俺が恐れていたヤンデレ彼女が…
ていうかすでに睨まれてゐる何故だろ?と考えたがすぐ気付いた
俺今魔理沙に肩貸してもらつてるんだ、つまり密着状態

これはやばい

「魔理沙、もう大丈夫ありがとう

「そうか?まあいいや、こいつはアリス・マーガトロイド、私と同じ魔法使いだな
アリス、こいつが最近友達になつた…」

「斎藤蓮ね、初めまして斎藤さん

「ああ…初めましてマーガトロイドさん」

「目と目が合ひつい瞬間…殺されると思いました…
やべえよ…あれ人殺している奴の目だよ…

名前じゃなくて名字で呼んだのは我ながらファインプレーだと思つ

「レン!本当に大丈夫か?顔色悪いだけじゃなくて震えてきたぞ」

そう言つて魔理沙は俺のデコに自分のデコをくつつけた

…アリスの方を見た、見なけりやよかつた

イカン、どんどん状況が悪化する気がする。デフレスパイナルな
状態だ

「そつそつだ魔理沙、俺靈夢に用事があつたんだ!だから急いでこ
こを出なきや」

「ん？ そつなのか、だつたらいつもみたいに送つてやる、 築取つて
くるぜ」

「いつもみたい…ね」

「ちょっと待つて俺をこの空間に放置しないで…」

魔理沙が戻つてくるまで一分も掛からなかつたが俺は永久のよう
に感じた

この間発言はアリスがただ一言「プチンとしおう」と呟いただけ
である。

そろそろ胃に風穴が開きそうだ

「よし、用意できた。じゃあレン私の腰に捕まれ」

「……プチン」

「あ、切れる音聞こえた」

魔操くリターンイナーメトネスス

テーレッテー

「結局こうなるのか…」

「あなたは危険な存在だわ…私と魔理沙にとつてね」

「…何でレンはアリスのスペカを直撃してピンピンしてるんだよ…それからアリス、お前に何があつた」

魔理沙はそういうてるが実際は満身創痍、ギャグ補正で見た目に反映されてないだけです

つまり中身はヤバい、しかし…このまま死ねるか！

「し…死ぬのは怖く無エ…だが…俺は…誇り高きネタに生きる漢の一人だ…」

過去の漢達も己の命燃え尽きる寸前までネタに生きたといはず…こんなこと、もはや人間じやねえ貴様なんぞに…しゃべつても理解できねえだろうがなア…

だから俺だつてなにかやらなくちやあ、カツ「悪くてあの世にも行けねエゼ…」

俺が最期に残すのはネタに生きた漢の魂だ…！人間の魂だ…！

ブン屋――――ツ…俺の最期のネタだゼ――受け取ってくれ――ツ…！」

「…おおおお仰せのとおりに…」

まさに風の如き速さで駆けつけてくれた射命丸を見届け俺は意識を失つた…

「待て待て待て！！妙にシリアスつぽかつたから突っ込みづらかつたけど…

いやどこから突っ込めばいいんだ！！」

「射命丸、やつかいな奴を…どちらにせよあなたを行かせるわけにはいかないわ…

何も知らないことにするのならかまわないけど」

「今は亡き友のため…」のネタを持ちかえらせて貰います…」

「私は無視か…！つて」

咒詛「首吊り蓬萊人形」

竜巻「天孫降臨の道しるべ」

「… なあレン、起きてるんだろ？ 私ツツ ハハ疲れたからひつ帰るぜ」

「それはマジ勘弁、収集つかなくて困ってるんだ」

本日の教訓、悪ノリは程々にね

その10（後書き）

オチなし

所謂投げっぱなし

正直スマミセンドでした

寺小屋での仕事も終わり家でゆっくりしようと思つたが
フランが家について来ると云つたので一緒にまつたつする」とこ
しより

「靈夢の靈圧が…消えた…？」

「靈夢がどうしたの？」

「うん詳しくはわからんが靈夢の元気が無い気がする」

一
じゅあ博麗神社に行つてあけなうーー！」

「えへへ」

フランを撫でる撫でる撫でる、まあ気持ち良さそうだしここにいる初めに会った時はひょっと暗い一面もあったが今はすいばる良一

これが教育か？

胸が熱くなりながら博麗神社に向かおうとした時、見覚えのある

侍っ子に声をかけられた

「お久しぶりですレンさん」

「ああ荷物の子か、久しぶりー妖夢、今日は荷物持つてないのな」

「わつこつ認識をそれでいるのですか…それよりレンさん
これから白玉楼で一緒に暮らしてもらいます」

「新手のプロポーズキターー…やつたぜー! フラン! へへつ…へつ」

「おめでとーレンー」

「え? いやわつこつ駄では無くて…」

「即行フラれたぜ…」

「よしよし」

フランが頭を撫でてくれた、胸の次は目頭が熱くなつてきただぜ…

「レンさん、隣の方は?」

「俺の教え子でフランつて叫び方

「生徒さんですか…………どこかで聞いたことあるよ! な

「まあ最近寺小屋に来たからあまり見たことないのも仕方あるもえ
…何の話してたっけ?」

「えーと……これから白玉楼で生活してほしこと聞こました」

「ああ、プロポーズ わが世の春が来た そう考へていた時期が俺にもありました……で良かったっけ？」

「……もう面倒くさいので単刀直入に言います

我が主のせいで家計がヤバいのであなたの能力が欲しいです

「色々と残念な理由だな……」

せつ あはトキメキを感じていたのにやつぱりこんな結末か……
絶望していたところにちよつと必死な形相でフランが反論した

「駄目だよ！ レンがいなくなるの嫌だし……

レンが寺小屋からいなくなつたら誰が教師をやるの！？」

「慧音、けーねーるから忘れてあげないで……」

「フランちゃん、申し訳ありませんが彼を連れていかないと色々と
ヤバいので……」

「エンゲル係数がヤバいんですね、わかります」

「……フフフ、小数点を四捨五入したら100%になるんですよ……」

「つおう、田が病んでやがる……」

なるほど、苦労人キャラか、てかほぼ100%つてどんだけだよ……
俺が呆然としているとフランが妖夢に近づいた

「とにかく力ずくでも連れて行きますー！」

「…ふーん、じゃあ妖夢、私と弾幕『じつ』して勝てたりいよ」

「弾幕『じつ』ですか、私少し強いですよ?」

「なら大丈夫だね!アハハ、すぐ壊れない『テネ?』

「ハツ狂氣!?」

「レン——勝つたよ——」

「…みょん」

結果はフランの圧勝であった

俺はこの子と弾幕『じつ』しようとしたのか…

「フランのレベルが高すぎる件について、色々と凄すぎだろ
まさか分身殺法まで使うとは…大した奴だ…」

「…ねえレンさん、この子つてもしかしてフルネームは
フレンドール・スカーレットっていいますか?」

「おお、よく知つてたな。吸血鬼でノミコア・スカーレットさんの妹だ」

「…」の子が悪魔の妹だったとは

「まああれだ、百聞は一見に如かずって言つだりつ
会わなきやどんな子かはわからんよ
妖夢はそんなどからいつまでも妖夢なのだつて言われないか？」

「み、よんー何で知つてるんですか！？」

「俺が斎藤蓮だからです（キリッ

…なあフラン、何か忘れてないか？」

「何があつたつけ？」

「…まあいいや、今日は俺の家に寄らはずそのまま帰りなさい
今から来たら帰りが遅くなるしな
それから妖夢、適当に食糧見繕つてやるから白玉楼とやらの永住
は勘弁してくれ」

「はーい！」

「あつがとうござますーまた来ます」

「また来るのかよ...」

今日も騒がしい一日でした

その11（後書き）

妖夢とフランツて面識無かったと思うのでそういう設定にしました

その12（前書き）

主人公強化計画始めました

昨日の妖夢来襲のインパクトが強すぎて靈夢の事をすっかり忘れていた

軽く焦った俺は慧音に断りを入れて博麗神社に行くことにするとそこには…案外元気そうな靈夢がいた

「おはよー靈夢、意外と元気そうだな。

昨日俺の第六感が靈夢がピンチだと言ったのだが…」

「だつたら来なさいよ…昨日は残りの食材の量に絶望して声上げたんだから」

俺の第六感は鈍つてはいなかつたらしい

「後で補給しといてよね、それにしてもアンタ早くから来たわね
徒歩でしょ？もしかしてかなり早起き？」

「フフフ、聞いて驚け！！

実はワタクシ昨日から飛べるようになりました！
ついでにもう一つ、生活に役立つ能力が増えたな

「待ちなさい、何で能力がそんなに簡単に増えるのよ…！
明らかに飛べるようになるより重要なことじょ！が！」

「俺からすれば飛べる能力の方が欲しかったんだけどなあ…

む、我が第六感に反応あり。

この反応、もしや…「bab「飛光虫ネスト」アツー！」

「紫！？…いや何で私じゃなくてアンタが紫の気配を分かるのよ
私わからなかつたのに…」

「あら、私の気配はわからないの？それは良いことを聞いたわ
ところでレン、今何を言おうとしたのかしら？」

「…紫さんが来ると思つて効果音を付けてみよつと思ついました」

「そう、でも…次は無いわよ？」

「サーイエツサーーー！」

初対面の時は優しそうだつたのにすぐ怖い。
俺が何をしたと

「ところで紫、何でアンタはここに来たの？またコイツの能力の説
明？」

「それもあるけど忠告にね、彼自身は危険じゃないけど彼の能力は
危険だから」

「ん？俺の新しい能力って「ゴミ」を消す程度の能力じゃないの？」

「違うわよ、くこの世に存在する物を消す程度の能力>
物と認識すれば何でも消せるわ…例えそれが人間であつてもね
アンタって本当に能力だけは規格外ね…」

「厨」能力k t k r！でも魔力が無いから消せるものはあんまり無

「いつオチですね、わかります」

「そ、うなんだけれどね、でももし能力を奪う妖怪があなたを襲つたら…ゾッとしないわ」

「紫さん……そんなシリアスな展開あるん?」

「…何故かしら、想像しにくいわね」

それから少し話し合つたがまあ大丈夫だろうといつ結論に達した
紫さんは俺の交友関係から危険な事にはならないと判断したらしい
魔理沙、靈夢、慧音、フラン、妖夢…
まあまだ増えるだろうが強い女の子が俺を守つてくれるはずだ!
…言つて情けないが仕方ないね

あと能力が増えたから基礎能力が向上して空も飛べるよになつたらしい

「やつぱりそんな能力より空飛べる方が嬉しい、『ミミ捨ての必要が
無いのは便利だけど」

「一応言つけど、あなたの能力は〇から一を作り一を〇にする」と
ができるのよ?

「とても恐ろしい能力だと自覚しておいてね」

「〇から一、一を〇か…良い響きだ、俺の邪氣眼が刺激されるなあ…
クツ…静まれっ…第三の能力が目覚めるツ…！」

「五月蠅いから外でやつてくれない?後そんなに元気だつたら早く
食糧補給しなさい」

「…」

靈夢は突っ込んでくれるのは良いが冷たく流したりするから困る

「そういえば紫さんってどこに住んでるの?
人里にはいないよな?」

「フフッ 良い女には秘密が付きものよ」

「良い女って… そういう年齢じゃないでしょ」

本題が終わつたので雑談に興じていたのだが靈夢が爆弾投入
靈夢は気にしていないが空気が変わつた
これは…怒氣ッ…！

「靈夢、あなたは誰にも遠慮をしない性格と知つていたけど
言つていいことといけない事ぐらいわからないのかしら?」

「そうは言つたつて1000年以上生きてる大妖怪でしょ?」

「なるほど、下一桁は18歳という事ですね、わかりました

「レン?次はないと言つたわよね?」

「……反省はしていない！――」

「そういうえば最近暑くなってきたわね
だから貴方をもつと暑い場所に送つてあげるわ

灼熱地獄にね

すると突然俺の足元にスキマが開いた
紫さんは俺が灼熱地獄で苦しむと想つてているのだろうが、んなこ
とはない

「かかつたな！八雲紫ッ！ これが我が『逃走経路』だ…
きせまはこの斎藤蓮との知恵比べに負けたのだあああ…」

これでこの重い空気から逃れられる
ドップラー効果を起しながら俺はスキマに落ちて行つた

「…何かしらこの敗北感」

「アンタの負けでしょ、紫
アイツは危険だろうが何だらうが未知な所に行けるなら喜ぶ奴な
んだから」

「そり…私も帰るわ。ちょっと疲れたし…」

「へえ…疲れた様子の紫を見られるなんて珍しいこともあるわね」

「…」

その12（後書き）

強化結果、飛べるようになり移動範囲拡大。以上

戦闘？しませんよ　ｗｗ

あと無理やりだけ地霊殿にエントしたよ！

その13（前書き）

ポケモンのマイブームが沈静化した今ガンダムVSガンダムの最新作にハマってしまいましたでござります。
お財布からお金ががががが

拝啓お父さん、お母さん、お元気ですか？

今僕は地獄にいます。

もちろん悪事を働いて地獄に落ちたわけじゃありませんよ？
まあ落ちたという点ではそうですが（笑）
お母さんは最近体重を気にしてましたよね？

でしたら灼熱地獄、おススメです。

僕なんか汗が滝のように流れて意識が…

「暑い！氷具現アイス具現！！涼しくなあれつ…涼しくなあれつ…！
熱氣退散！熱氣退散！涼しい空間戻つてこいっ…！」

「…ひー！そこの人間…」ここで何してるの…！」

異常に暑いので涼んでいたら黒い羽根の生えた女の子（二人目）
が飛んできた

蹴れば人を殺せそうな靴を右足に履き右手にロックバスターを付
けていた

これまた濃いキャラだな…

「ふむ、地獄に来ての第一村人発見

おーい、助…」

そこまで言つて俺は固まつた、何と女の子が巨大なエネルギー弾
を生成したのだ！

ていうかあのポーズ的にまさか！

「フリーーザの『テスボール！？』もしくはゲマのメラゾーマキター！ やめルーラー。そんなモンをぶつぱなしたるこの星が消えるぞっ！」

「え？ そんなに危ないの…？ だつたらやらせなきゃ…。」

ノリで書つたセリフを女の子は本気で受け止めたようだ

「まあ話せる状態になつたし…よしとしよう。」

俺は斎藤蓮つて書うんだが君は？」

「私？ 私は靈鳥路空、皆にはお空つて呼ばれてるわ」

「お空ね、ア解。それにしても地獄つて存外フレンドリーな場所なんだな」

「リリは地獄じやなくて灼熱地獄跡だよ」

「なんどー…まあいいか」

「えーと…何で私はここに来たんだっけ？」

「俺を案内する為だと思つよ」

「そつかー！」

適当に都合の良い嘘つたら信じたで、じゃね

「じゃあどうあえず地靈殿に行こう。」

「おうー。」

「『こ』が地霊殿だよー。こに私の『こ』主人さまがいるんだ」

「まずお空に案内してもらつたのは大きな屋敷だった
てかお空のような女の子に『こ』主人様と言わせるつて…

「『その』主人様とやらが女であると信じたい』ですか、なり『女
心を私は女ですから』

「心を読まれただと…まさかスタンダ「違います」せめて最後まで
言わせてくれると嬉しいです」

「でも心を読む能力であるといつことは正しいです
私の名前は古明地さとし、覚といつ妖怪です」

「なるほど、だから心が読まれたのか…
これはH口『ことを考えて赤面せせるといつ[足]番ネタをせざるを得ない!』

「生娘じゃないんですからそんな反応しませんよ…

『俺の名前は斎藤蓮、聞こえる?通じてる?』通じてますよ

「おお、すげえ!なかなかに便利そうな能力だなー」

「便利…ですか、そのような事を言う人間は珍しいです
たいていの人間…いや妖怪も私の能力を恐れますから」

「なんだ? 暗い顔をして、マイナス思考なんて損なだけだぜ?
細けえこたあいいんだよ!」

「フフ、そうですか。お空、お客様にお茶菓子の用意お願ひするね

「はーいさとり様」

「なんだか一方的な客人だといつのに申し訳ない」

「いえ、お気になさらず。それでは『おしゃべり』を始めましょう
か」

まあ話の内容はここに關する俺の疑問とかだつた。
てかさとりの能力マジ便利、俺の言いたい事を的確に分かってくれるから話がすごいスムーズだ
ちなみにお空はさとりと話してる途中に「あ、そうだ!」と言つ
どこかに行つてしまつた

「いやはや、おしゃべりだといつのに俺の疑問解消コーナになつち
まつた、ありがとな」

「こちらも有意義な時間を過ごせましたからかまいませんよ」

「創価創価、それは重畠……そこだつ！」

「さやつー。」

第六感が発動したので何もない所に手を伸ばしてみると何かに触れ女の子が現れた

ちなみに触れた場所は頭だつたから問題ない

さとりと同じくバックベアードなアクセサリーを付けている

「見た目から察するにさとりの妹とみた、どやつー。」

「すうい！ 憂いねお兄ちゃん！ どうして私がいるつて分かったの？」

「フツ例えく姿を消す程度の能力」であるうとも

「」の里の熱血教師、斎藤蓮にかかれれば無いようなもんだぜ！」

「…レンさん、」の子の名前は古明地」にし。」想像通り私の妹でして

正しくは「無意識を操る程度の能力」です。」

「無意識？…なるほど無我の境地に達してテニスが楽しくな」「全然違います」左様ですか？」

「レンつていうんだー、レンつて能力持ちなの？だから分かったの？」

「能力持ちだけど全然関係ナシ、敢えて理由をつけるなら…俺だからかな」

「」の時俺は人生で一番いいドヤ顔が出来ていたと思つ。

俺だから……だつてお~~~~~

「ハハツ、レンって面白こねーお姉ちゃん、レンってここに住むの
？」

「いいえ、彼には人里での生活があるから。今日は……そうですね。
レンさん、本日のところは地靈殿に泊まつていいでござい。

明日お空に人里へ送らせますか？」

「何から何までありがとなー、そういうや旧都つて危険なんだっけ?
地靈殿がフランクな場所だつたから忘れてた」

「えーーー、レン帰つちやうの？面白くないなー……死体にして部屋に飾
つちやおうかな」

「！」こしー？そんな物騒な事をお姉さんにはお姉ちゃんどう
かと思づ…

「おお、さとりの素が垣間見れた。

まあそれは置いといて、こいしちゃんや。

だつたら寺ウチ小屋に来るかい？

毎日は…遠いから難しそうだが暇な時に来ても構わんよ」

「いいのー？」

「慧音なら…それでも慧音ならやつてくれる…」フランの時みた
いに

「…今度慧音さんに何か送つておきます。

「…」

「…」

「行つていいの? むすめ姉ちゃんは止めると思つたんだだけだ」

「言つても聞かないしね、ではレンをさうこしをよひじへお願ひします

……わて、もつ良い時間ですし大食堂に行きましょうか

「わざり様、レンの歓迎会をしたいんですけどがいいですよー。」

「いいよ。でもお姫、わざりのことは準備する前に言つてね

お姫が元氣に戻つてきた、歓迎会?

「じつはまた? 僕明日帰るしだだ地底で迷子になつただけだぞ?」

「歓迎会好きですから、何か理由をつけて宴会をしたいのですよ

「アリアリーハー! 馳走もお酒もこっぽいあるよー。」

「ふむ、でも俺未成年なんだよな……お酒飲んだ事無いし」

「それはあなたがいた世界でのルールです、ここは地底界
レンさんが気にする」とはありませんよ」

「わざりだよレン、飲もうよ」

「飲もう。」

「こじもお空も進めてるこじで逃げれば漢が廢る。

郷に入つては郷に従えといつし、ええい！ままよ！

「そっか、ならばガンガン飲もうぜ！」

「……」は俺が酔いつぶれる場面と思つんだけどなあ……はいウロンのカビゾーー

「すみません…」

真っ先に酔いつぶれたのは予想外にもさとりだつた

ry

「ここは俺が人生初の酒を飲み暴走するというパターンと思ったの
だが…」
というループであつて、この間に潰れてしまったようだ。

「いやここは酔っ払って天然口説きが発動し女の子にフラグを立てるというパターンだったのでは！？」

「れ…レンさん、あつあまり叫ばないでください…頭が…」

どうでもいいがさとりのカリスマが消えたなーと思った俺だった

その13（後書き）

ひとつがレンを地靈殿に泊めた理由は
お空が歓迎会をしようとしているから、ヒーリングで
酔った状態で帰したら危ないですし。

今までで一番長い話だけど地の文は一番少ない気がする

その14（前書き）

前回お空が好きだから無理やり地霊殿にオリ主突っ込んだのに古明地姉妹中心になってしまったでござります。
：次にお空と絡ませるにはどうしよう

「幻想郷よ、私は帰つてきたあ……」

「帰つてきたー！」

地靈殿での宴会の翌日、俺はお空ではなくこいしに地上まで送つてもらつた。

帰り道は「ぬましーぬましー」と言つてゐる妖怪以外インパクトある人いなかつたので割愛

まあという訳でこいしを連れて人里へ、いや慧音の家へ

「けーね、新しい生徒を連れてきた。オーバー」

「…レン、お前はよほど私の胃に穴を開けたいらしいな」

「大丈夫大丈夫、この子は発想がちょっと危険なだけだから問題無い」

「寺小屋がEX飛んでP化しているんだが…」

「もう一人増えたらどうなるんだろうな、それはそれで面白そつだフランやこいしより強い生徒に会いに行く」

「何か言つたか？」

「いえ、何でも無いです」

慧音がアップを始めたのでこれ以上からかうのはやめることに。

指の骨をポキポキ鳴らしていろが絶対頭突きが来るな

「だいたいお前は私の了解もなく勝手な事をだな」

「まあまあ慧音、落ち着け。」

「ねえねえレン、早く寺小屋行こー！」

「おお、スマンスマン。やつこつ訳で慧音、今日は俺に任せやるー！」

「待てー！話はまだ終わって……」

教室に入ってしまえば慧音も手は出せまい、後でどうでもなると

「さて、転校生が来たという事でこの時間は自由にしていいぞー！」

「うわあ、子供がいっぱいだー！」

俺がやつこつ訳でフランの時と同じくここの周りに生徒が殺到した
流石にマイペースなこいしもこの状況には戸惑いを隠せないよつ
だ、

ちなみにフランを見てみると今回は押し寄せる側なのでこの状況
を楽しんでいた

「ふう疲れた、ペシトに揉みくじらされてるお姉ちゃんの気持ちがわかったよ」

「お疲れさん、どうだ？ 友達できたか？」

「うんー、フランちゃんだと気が合った。今日紅魔館つて所に遊びに行くなー」

「ふむふむ、ええ事やなあ。でもちやんと地霊殿に帰るんだぞせとりが心配するだらうしな」

「ひーん…わかった」

「ひこーーー一緒に帰るー。」

「うふ、フランー、じゃあねーレン」

「バイバイー！」

「今日一田でフランヒーこしほ仲良くなつたらしく、何か近いモノでもあつたのだらう

「わー、今日も一田の仕事をしたなあ…まあ帰るかー。」

「ここせん、忘れてこないことがあるだらう。」

振り向くとガイナ立ちをしている慧音がいた。

「慧音、言わせてもらつが…私は謝らないイイイ！」

「まずこれは私の頭痛の分だつ！」

けいねのずつき！

レンはひるんどうけない！
てか頭痛いんだつたら頭突きするなよ

「次に私の胃の分だつ！」

けいねのずつき！

レンはたおれた

「そして！そして最後につ！私の立場の分だーッ！」

けいねのずつきが炸裂ウ！

レンはめのまえがまつかになつた。

「…はつ、やり過ぎた！大丈夫か！？」

「…うん、何かごめんな慧音。これからは自重することにするわ

恩人なのに度が過ぎちまつたな、うん。」

「そっそつか……私が言つのも難だが、いつもの霸氣がないぞ」

「氣のせいだろ、これが素だよ」

最後の頭突きをするときの慧音の表情を見ると
何というか不憫と感じてしまったとは言えんよ…

イイハナシダツタノニナー

その14（後書き）

後先考えないSNSなものですから難産でした
本当にノリで生徒増やすのは自重しよう…うん

今の主の現状が学際やらバイトもいろいろなことで次回の更新は今
回ようやく間に遅くなりそうです（汗
主の駄文をお待ち頂いてくださる方がいらっしゃれば申し訳ござ
いませぬ

「魔理沙ー俺だー遊びに来たぞ」

今回は嫌な予感もしないので普通に魔理沙の家に遊びに来た
しかし返事が無い、どうしたものか

「あーん? 居ないのか?」

…なるほどSUNDAYじゃねーの

「とこづ訳で博麗神社にやつてきました」

「どういう訳かさっぱり分からなーいわ」

ちょっと待つてみたけど突っ込んでくれる人居なかつたので移動
することに

一人でボケるつて予想以上に寂しいものだった

「まあまあ、俺が暇だしいいじゃん、お茶うめえ」

「まあ損するわけじゃないからいいけど
お煎餅だしてくれない？」

「あいよー」

最近ちょっと刺激がありすぎたのでのんびりするのもいいもんだ
神社のこのいかにも和な空間が素晴らしい
俺の家は漫画とかガンプラとか幻想郷に来た事を忘れそつた部屋
となつているからな

「そういや靈夢、俺ついに無限の魔力の所持者になつたんだぜ！
エリクサー（笑）が作れるようになつたから死者は蘇らないけど
魔力ぐらいは回復する
つまり能力 エリクサーの無限コンボが実現に…」

「（笑）のせいで感覚狂うけど凄いモノ作れるよくなつたわね…
ところでおチは？」

「エリクサー（笑）を作るのに俺の魔力の5分の4必要でな？
残りの魔力は飛行に欲しいから弾幕張れないんだ…」

「…もうアンタが強くなれないのは周知の事実だから諦めなさい」

「意地があるだろ？が！男の子にはよお！」

つてカズマの兄ちゃんが言つてた！

「しかしどうにかしてスペカぐらいは作れないものか
EASYでもいいからカツコいい名前付けて技名叫びたい」

「どうせ語尾に（笑）が付くのがオチよ」

「絶望したッ！…突きつけられた現実に絶望した…」

インフィニティバースト（笑）カタストロファイストライク（笑）
…想像するだけで悲しくなってきた

「斎藤蓮は心に大ダメージを受けた！
靈夢、お前なりに励ましてくれ」

「お腹空いたからお昼御飯作ってくれない?
暑くなってきたから冷たいのがいいわ」

「畜生！…靈夢の結構綺麗好き…」

「はいはい、ありがと」

男にも涙を流していい時はある
俺は泣きながら台所へ走つて行つた

「さて、お腹も膨れたしそろそろ帰るが…人里まで帰るのめんどいな
瞬間移動でもできたらいいんだけど」

「じゃあスキマでも作ってみたら?」

「なるほど、その手があつたか!」

「…おお、できたぞ!」

「え、嘘でしょ?」

「じゃあな~良いアドバイスありがとよ!」

果然としている靈夢をよそに俺はスキマに入つて行つた。
フハハハ、これで俺の行動範囲がさらに大きくなるぜ!!

「…出口が作れねえ…」

紫さんに救出されたのは三日後の事だった

その16（前書き）

投稿が遅れる予告が無い方が遅い件について
本当に申し訳ない

化災炎災炎炎炎炒炎災炎災炭化

”住めば都”といつ言葉がある。

自分には国語力がないから端的に言つが

”慣れてしまえばどうという事はない！”といつことである
例え住むところがスキマであつてもどうといつ事はないのだ

「てかマジで住みやすいなスキマ。ニアロンでも付いてるのか？」

「…ビうじてあなたはまたスキマに面るのかじひ

呆れた顔で紫さんが訪ねてきた。

そんな顔で俺を見ないでくれ！

「今度はイケると思つたんだ！」

「その結果がこれね…スキマ開けつ放しで出口を作る練習をすれば
いいんじやない？」

「いやいや人は追い詰められて真価を發揮できますから。背水の陣
つてやつ？」

「そう、じゃあ御機嫌よう。存分に追い詰められればいいわ

「御免なさい、助けてください」

オリ主必須スキル音速土下座は俺も使えるよつだ
なのに嬉しい、不思議！

「でもひゅひゅここわ、あなたと話したかった事があるの」

「うん?……色々あつたが悪気はなかった!」

「別にセツヒ話じやないわよ…

「あなた妖怪になつてみない?」

「おおー!まさかの強化フラグですか!?」

「そうね、妖怪になれば寿命もなくなるし何より魔力が増えて能力を思う存分使えるわ
どう?なつてみない?」

魅力的な話である、念願のオリ主無双が出来るかもしれないし
…敵つて誰だろう?
まあ俺の結論はすでに決まっているがな

「だが断る!

この斎藤蓮が最も好きな事のひとつは
自分の立場が上と思つてゐるやつに『〇〇』と断つてやる事だ…

「あら?良い話だと思つたんだけどね。どうして?」

「この台詞が言いたかつたからです」

「…そう

紫さんはゲンナリしていた。

正直「俺は人間をやめるぞー紫ーツー」とも言いたくて迷った
…あれ? 妖怪になつた方が言える台詞がくね?

「しまつた…妖怪になつたら『私は後二回変身を残している』とか
言えたかも
まあ男に『言はないから良いけどね』

「でもいいの? 妖怪になれば不死になれるかもしねないのよ?」

「うーん…まあじいちゃんになつて死にたくなかつたら考えてみるよ
今は面白にからじうでもいいや」

「ふふ、人間なのに欲が無いのね。そのあなたの性格は嫌いじゃな
いわよ
あなたが『YES』と言つたら実けり…改造手術をしていたのだ
けれどね」

「実験だらうと改造手術だらうと怖い件について」

「深く考えてなかつたが俺の選択は当たりだつたのかも知れない
でももしかしたら改造されて仮面ライダーV3とかになれたのか
も…
いやショックカーになるとかのオチだらうな…

「まあ今更別にどうでもいいや。じゃあ俺そろそろ帰るぜ、じゃあ
なー」

「…出でなーのアーリーもひつもひつだの?」

「ほり、無意識の時に力を使つてなせるとあるじやん? そのパタ
ーンで攻めてみようかと」

「さう意識してる時点では意識じやないけどね

「なん…だと…」

結局今回も織さとに救出されたことになりましたとや。

その17（前書き）

リアルがマジで忙しい最近、更新遅くなってしまって申し訳ござります

せん（汗）

一息つくまではゆっくり更新にならうですが、いつ承ぐださこへへ；

授業が終わりフランが俺の家に寄つて帰るとの事なので一人で家に向かつていたところ俺の家の前に見知らぬ女性がいた。緑色の髪をした美少女である。それにしてもデカイ、胸が

「ふむ、こんな女性に出会つたならば腕を振らざるを得ない」

（。。。）〇三。 オッパイ！ オッパイ！

「ねえ、レン。何してるの？」

「うん？まあ男つてやつはみんな野獣なのさ。フランよ、変な男に話しかけられたら即逃げるか殺るよ！」
…あれ？俺アウトじゃね？」

「セーフに限りなく遠いアウトだね！」

「ナンテコッタイ、これは俺の教員免許剥奪フラグが立つてしまつた」

「なんていつたい！」

「あの～そろそろもうじでしょうか？」

待ち人を放置するもの失礼なので談笑は中斷することに

「いやはやすまないすまない、えーと」

「私の名前は東風谷早苗です。守屋神社の巫女をしています」の度は…えっと、私の神社が深刻な信仰不足でして…」

「つまり宗教の勧誘か、幻想郷にもこれがあるとは…今度子供たちにこういうのは断るよつ教えねばフラン、こうこうのは怖いからすぐこ断るよつになすぐだぞ?早さは力なのだ!」

「うん、わかつた!」

「いえいえいえ!
むしろ子供に守屋を信仰していただけるよつ言つていただきたいのですが…」

「外の世界出身としてはそりこいつのまちよつとなえ

「あなたが思つているよつな危ない宗教じゃありませんから…話ぐらい聞いてもらえませんか?」

「ふむ……そだー俺を弾幕ごつこで倒すことができたら信仰してやつわ」

「本當ですか!?でしたらお願ひします!

…魔力もあまり感じませんし楽勝ですね(ボソ)

「さあやるか、来いいいいいー・フフアアアアアンウイイイイイング(真ゲッター風)」

「うーんガシャーンー!」

説明しよう！用はフランが俺に背後から羽交い締めのよつた感じでくつこてるだけである

「……何をしていらっしゃるのですか？」

「いやあ俺弾幕とが出せないけど弾幕」」に体験してみたくてよつそれドコの前フランと並んでたんだわ」

「思ついたのだ」」れだよー。」

「」れつて私とフランさんが戦つてるだけでは。」

「細けえこたあいいんだよー」」フランが翼でフランが牙なんだから俺は…オプショண。」

「役割を持たないオプショணって一体…まあ始めましょうか」

「よしきた、フラン！最初から全力で飛ばしてくれ！」

「わかった、こくよー！」

夢幻「幻月」

「」やー。」

「おお凄い迫力だった、ブライトさんも大満足の弾幕の濃さだったな」

「ハアハア…凌ぎました

…これほどのスペカならば妖力もあまり残つて無いでしょ…ハア

「何勘違いしてるんだ

まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ…

フラン、これを飲めい！」

フランに渡したのはもちろんヒリクサー（笑）
何故なら彼女もまた、特別な存在だ（ry）

「んぐんぐ…すごいす”ーい！力が漲ってきたよ！」

「なつなんですかそれは！？チートです、ずるいです！
そんな魔法薬使っちゃダメです！」

「そういう台詞を言いたければ若本ボイスで出直してきな！
確か『アイテムなんぞ使ってんじゃねえ！』って
バルバトスが怯んでいたら発動しなかつたなあ…
ところで早苗さん、まだやるかい？」

「…ギブアップします」

「左様か、フランお疲れ。そしてありがとうございます！」

てかフランハビネグリコ強いんだ?」

「EXのボスぐりこだよ」

「…まあボスだったら強いだろ? な、うん」

正直良く分からぬ回答だったが早苗さんのリアクション的に凄いんだろ?

後このままじや早苗さんがあまりに理不尽なので妥協案を出す」と

「早苗さん早苗さん、疲れただろ? ひさウチに上がっていつた? お茶出すし話ぐりこなら聞くよ?」

「本当にですか! 頑張った甲斐がありました… では諏訪子様と神奈子様のお話を…」

「まあひとつあるず中に入るうか、フランはお話を聞くか?」

「興味無いからこりこりや、じやあねーレンー!」

まあ正直やつ過ぎた感が否めなことお話をぐりこ聞きましょつかねえ

そんな考へで早苗わんを家の中に入れたが思わぬ事態となつた

「これはガンプラじゃないですか！」

「うわあウイングゼロ…ああー！フルバー＝アンとサイサリスもある
！」

「え？ と早苗わんや、お話をいたしました？」

「後でです！」

「…左様か」

結局早苗わんはありがたいお話を無く帰つて行つた
いやまあ同じ趣味の会話ができるよつになつたのは良い事なんだ
けどね…「こ

その17（後書き）

気が付いたらチート最強オリ主物になっていた件
主人公無双で原作キャラフルボッコの回となってしまいました

蓮「ナンテコッタイ！」

フラン「なんてこつたい！」

その18（前書き）

もつ余話文だけで一話作っちゃつていいいかな…

～地靈殿～

「ねえねえお姉ちゃん

「どうしたの～」

「昨日レンから保護者宛てにプリントを渡されたのだけどお姉ちゃんに渡せばいいのかな？」

「そうね、私が読むわ

ええと…『家庭訪問のお知らせ。』

レンさん一人でここまで来ても「うのは危ないかな
もう一枚…『地底なう』…………ええ…？これ昨日のプリントよね
！？

「さつ搜さなきや…あ…レンさんってあれ？」

「おう、勝手にお邪魔していいよー」

「こりこりしゃーー」

「…レンさん、昨日はまだいらっしゃったよ

「ん？…ああ、昨日は鬼たちの宴会に交じってたよ
勇儀の姉御が良い人でな、おかげで鬼たちと仲良くなつたぜいー」

地靈殿への道を覚えていなかつたのでどうあえず田んぼへ人に声

をかけたが

なかなかどうじで、良い人だったので気が付いたら仲良くなつて
いた。

ナイズ姉御キャラ、ナイズおっぱい、そして何故ブルマじゃなか
つたし

「一応レンちゃんもいつの事を考へるのですね」

「男だからね！仕方ないさ」

勇儀の姉御もさうだが早苗さんも紫さんも、幻想郷には巨乳率が
高い気がする

今後も増えるかもと考へるとオラなんだかワクワクして来たぞ

「話を振つたのは私ですが…胸の事を考へるのはやめてください
……特に大きさとか」

「むむむ、レンは古明地姉妹をテイスつてるのか！」

「フン一世上の中には『貧乳はステータス』といふ言葉があつてだな
むしろそっちの方が需要が……いやなんでもない」

「…そういえば家庭訪問でしたね、寺小屋でのこいしの様子を教えて
いただけますか？」

「そついや家庭訪問だつたな…つん…」

「？？」

俺の考えを読んだのだろう、せとりが露骨に話題を転換してきた

のでありがたく乗つかる

「いしにはあまり聞かせたくない世界だしなー!うん!」

「「いしの事だが… よく能力使って慧音を困らせてるな」

「「いし、 私人に迷惑かけちゃ駄目って言つたよね?」

「アーアー聞こえなーい」

「まあ安心しなって、迷惑かけてるのは慧音だけで子供たちとは仲良くしてるから」

「…慧音さんに何を送るか真剣に考えておきます」

「慧音は犠牲になつて…慧音…」

まあ実際の話、慧音は子供たちに弄られる事が多いので「いし」人が迷惑をかけている訳でもないし

何より慧音が満更でもなさそうなので問題無いかと言つたら問題無いのだが

そして俺の心を読んでさとつは安心したようだ、と表情から推測してみる。

「少し失礼しますね、客人が来ているとこりのにお茶を淹れるのを忘れていました」

「ああ、お気づかいなくつて言つてもお茶を淹れてもらわれちゃうのが家庭訪問のお決まり。

遠慮無く頂くぜ、ありがとなー

…行つたか

おーいこいし、実は慧音君が今アリ胃薬とか飲んでるぐらいだから
イタズラはほどほどににな?」

「えー…「アーランド」しそうかなー」

「アーランドハイと聞こなさー…」

文字通り飛んできたお姉ちゃんであった

その一章（後書き）

お空「私の出番は？」
作者「あ……」

毎日グダグダと過ぐしてこるうちに気が付けば夏になっていた。
さて、自分がいるのは美少女率の非常に高い幻想郷
夏と美少女、この二つの単語から皆様は何を思い浮かべるだろう
か？

そうだね、水着だね。

ましてや文化が進んでいないこの幻想郷
涼をとる手段といつたら水浴びだらう！

そう考えていた時期が俺にもありました

「このイングア派じもぬ！」

貴様らには水着に着替えてキャッキャウフフあるといつ
サービス精神が無いのかあ！」

「いきなり立ち上がったと思えば…早くサイロ口振れ、次はレンの
番だ！」

「私吸血鬼だから流水は駄目なんだー」

「つむかわねー寝てるんだから静かにしてよ」

現在俺の家で俺と魔理沙とフランで桃鉄を、靈夢は寝をしてあります

ちなみに電力は太陽光、知つてて良かつたソーラーパネル

「まあフランは仕方ないとしてだ、暑いから泳ぐとかいう発想は無いのか？」

「どうして泳がないといけないのよ、ここならじつとしてるだけでも涼しいじゃない」

「お前の家は涼しいし暇つぶせるしな、ここで事足りるぜ」

「原因は俺だつたアアア！」

俺自身がおいしいフラグを潰してしまつとは何たる不覚…ふといこでちょっとした疑問が浮上した。

「そもそもお前ら水着持つてるのか？」

「失礼な、私も女だぜ？持つてるに決まつてるじゃないか

「私も一応持つてるよ、何故か！」

「わつふるわつふる、…で靈夢は？」

「女だけど持つてないわよ、悪い？」

「さらしで泳ぐと申したか、流石靈夢、格が違つて」「封魔針」痛え

「！」

靈夢は針を投げたら昼寝にシフトした、フリーダム過ぎるぜ…
桃鉄組の方に振りかえると何故か魔理沙は俺のトライマ、八角形
の物体を持っていた

「ちょ！それやめれ、この前聞いたんだがマスパって山を吹っ飛ば
せる威力持ってるらしいじゃねえか」

「お前が変な動向をし始めてるから持ってるだけだ
変な動向をしなければ、何の問題もないぜ」

「ネタ振りですね、わかりま『マスト』『嘘です』せん！」

「…全く、こいつに勉強を教えられてるフランが心配だぜ
フラン、こんな教師で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題無い」

「お前絶対フランに何か仕込んだだろ」

「ドヤ顔でやつてくれるとは流石我が生徒d…何故ばれたし

「とりあえず一発マスパいつとくか

「…愛があれば痛くない！」

久々のマスパは痛かったです。
愛が足りなかつたか…

「痛てて…あゝあ、家がボロボロじゃねえか。
すぐ直せるからいいけどさ」

「あはは…本当にレンってマスパくらつても平氣なんだね！」

「撃つことに威力を上げてるのに前へのダメージが減っていくつ
て…おかしいぜ」

「まあ俺だからな、ハツハツハ

さて現実逃避はやめて後ろの殺氣に立ち向かおうか！」

俺の後ろには鬼の形相をした靈夢が！
俺たちオワタヽ(^○^)／

「私はね…結構大雑把な性格なの…

だから面倒くさい」と考えず全員ぶつ殺す…！」

「フラン、逃げるぞ！スタコラサツサだぜ！」

「ちょ待てよ！」 キムタク風

魔理沙もフランも靈夢より逃げ足が速かつたようだ
残されたのは俺と靈夢の二人つきり

「その…あれだ…やせしくしてね」

御祓い棒で俺が泣いても殴られ続けました

その19（後書き）

台詞に マークをつけると人にイラッとする効果があると想っています
何故過去の俺は マークで済んだんだ…

「オールドタイプ最強はじつ者^者えてもガトーサンですよ…」

「いいや…まあ俺が好きだからってのもあるけど
ガロード最強は譲^うらねえ、なにより主人公補正あるしな…」

「それは卑怯です！」

最近よくあるガンダム談義、本日は朝早くから会話に花を咲かせております

早苗さんは本当によく遊びに来る

遊び過ぎて早苗さんのお泊りグッズが俺の家にある状況
ちなみにフラン、こいし、魔理沙のやつもある
すみませんりア充で
ハーレム築いちゃうかもグヘヘ
…まあずつとゲームしてるか喋つてるだけですけどね

「…ふう、ひょっとしあべり疲れましたね」

「だなーとりあえず昼飯食おうぜ

…ところどころしてまたこんな朝早くから遊びに来たん?・まあい
いけどね」

「え?…………あつー?忘れてました!

今日はレンさんを守矢神社に招待する為に来たのでした

「なんと」

という訳でやつて来ました守矢神社、妖怪の山の上にあったのでもしかすると射命丸さんに会つかもと思つたがそんな事は無かつたぜ…

まあ代わりに部下の人には会つたが

閑話休題 使ってみたかった

「ここが守矢神社…一人の神様がいるとかワクワクが止まんねえ！」

「一人とも素晴らしいお方です！きつとレンさんもすぐ守矢信者になりますよ」

「なにそれこわい」

「さあ入りましょう！」

きつとカリスマ溢れる神様達が登場するのだろう…
これフラグじゃないぞ！絶対違うからな！絶対だぞ！

「さーなーえーお腹空いたよー」

「朝早くから这里へ行っていたんだい早苗
もうお腹ペコペコだ…あつ」

「すつすみません…すぐ作りますから…」

「予想通りの展開で安心した
流石幻想郷、期待を裏切らない
早苗さんや、俺も手伝おう。俺も昼飯食つてないし」

「えと…あつがどうぞこまか」

昼食を食べながら会話のターン、いつも通りのやうやうですね、
わかります。

それにも片方は神っぽいがもう片方はどう見ても幼女です、
本当にあー（〃）

「ところでだ、レンだつたか？お前は早苗とどんな関係なんだい？」

「あつ…それ私も気になるね」

「神奈子様！そんな変な意味に聞こえる質問止めてください…
諏訪子さまも乗つからないで…」

どうやら守矢家では早苗さんは弄られポジのようだ
お仕えする一人の神様に弄られる巫女…
あるあー…あるな、うん

「俺と早苗さんとの関係か？とりあえず一晩中熱く語り合いつ関係と

「言つておひづか！」

「「おおつー」「

「レンさんもです！」

それにしてもこの神様たち話しやすい、想像以上にフランクである。

「フツ、ウチの早苗に手を出しちだなんて…覚悟はできてるのか？」

「ぬお！神の威圧感ぱねえ…だが敢えて言おつー。
娘さんを僕にくださいーお義母さんー！」

…と口づ神様の方に言つ

「…え？私に言つの？」

「いやいや…どうして諏訪子に言つたんだい？」

「何といふか…ほとばしる人妻臭がしたので」

「何故知つているー？」

「フフフ、時には博麗の巫女を上回る勘を持つ斎藤蓮を侮らないで
頂きたいー！」

幻想郷に来てからこの勘が一つの能力と思われるを得ない自分が

イル。

…と、まあこんな感じで昼食を終え雑談にシフト。
まあ元々雑談してましたが

「ところでだ、諏訪子さん。ちょっとお話があるんだが」

「ん、なんだい？ 早苗ならやうなこよ」

「もつそのネタ引つ張らないでくださいー！」

後ろで早苗さんが吼えているがとりあえず放置
俺は諏訪子さんを一目見たときから運命の赤い糸を感じずにはい
られなかつたのだ！

「ウチの寺小屋に

通わないか？」

「…………はい？」

思わず固まる諏訪子さん、一番早く反応したのは神奈子さんだつ
た。

「ハハハ！ 諏訪子の見た目だつたら寺小屋に通つても違和感無いし
いいじゃないか」

「んなー私が幼児体型だからって馬鹿にしてー。」

「今入学すれば何と何とー」のラングセルもプレゼントー。」

「ラングセルを背負つた諭訪子様…諭訪子様ー入学しちゃいましょーうー。

その御姿を見たい…いや見れば信仰する人も増える筈ですー。」

「今見たいって言つたよねー?それにそんな信仰は嫌だよー。」

「ふむふむ、早苗さんは諭訪子さんの色々な姿を見てみたいと推測した

…早苗さんよ、俺の能力を使えばコスプレさせたい放題だぜ?」

「まつー?それは真顔でした、でしたらどうあえず…「コスロコを作りくださいー。」

「お前もつ帰れ!そして寺小屋なんかには絶対通わないからな!」

これ以上怒らせるのもあれなので退散する」とした
寺小屋Pと越え計画はまだまだ遠そうだ

「とひりでだ、今日はアイツを入信させるために招いたのにコッチ

が入学せられそうになつてござつする

「全くだね……」

「……すみません、ちょっと興奮しそぎました」

守矢神社にて反省会が有つたとか無かつたとか

その21（前書き）

季節感無視の「」の「」

今年の夏になるころには冬の話書いてるのだろうか…
とりあえず深く考えず無心で読んでください

地底にもすっかり慣れたワタクシ斎藤蓮です
今日はこいしに誘われて地底の夏祭りに遊びに来た
せつかくなのでさとりも誘いお祭りを楽しむことに

「レンー！りんご飴、りんご飴買つてー！」

「フハハハ！かわいい女の子の子の頼みだ、おじちゃん張り切っちゃう
ぞー！」

「こーしーすみませんレンちゃん、私が出しますので…」

「いやいや気にすんな、どうせ金あつても使つ当てもないしな
それにだ……男つてのはカツコつけたがる生き物なんだぜ」

「フフフ、そうですか、なら私もりんご飴買つてもうつていいですか
？」

「よろこびーーちよつくり買つてくる」

せとりみたいため少女性に微笑まれながら頼まれたら断れないだろ
う…男として…

「りんご」飴を買つため屋台に向かつたといひの奥のおっちゃんに話しか
けられた

「兄ちゃん、古明地のと知り合いか？」

「まあ友達といつたところだぞ、それがどした？」

「いやどいたって…覚だぞ？心読まれて氣味悪くないのか？」

「おいおい、正々堂々が好きな鬼が陰口叩いてどじすな？
それに友達だって言つた奴の目の前で悪口言つんじゃねえよ
てかこの斎藤蓮、お天道様に顔向けできる生き方してきたから
心読まれても問題ない！」

「ハツハツハーレンは相変わらずそういう事をいい田で言つね！
それからそこのお前は

ちょっと飛んでこい」

会話をしていた鬼がブツ飛ばされ後ろを振り向くと勇戯の姉御が立つていた

ちなみに姉御とは以前宴会で酒作つてみせたら凄い仲良くなつた
なかなか手に入らないレア物だつたらしい
それはさておき

姉御は今回セクスイーな着物を着ている。

スリットから見える太股、胸元からは大胆に強調されたおっぱい
が見え…

・・・・・ふう

「ああ、星熊勇戯さん、ですか。こんなにちは

「どいたんだい！？今さつきと口調も雰囲気も全然違つだ…」

「いえ、ワタクシは、こつも、こんな感じで、『じゃこまよ?』

「おーい帰つて!」

「痛い!」

姉御から強烈な「パンパン」が飛んできた、マジ首が千切れるかと

「痛いぜ姉御、『コ』から血が…マジで出でる」

「唾付けときや治るよ…かけてやるつかい?」

「なんだ?」褒美か

「なんでやうなる!……アンタと話してると私のベースが乱れるよ
…」

「剛速球とチョンジオブベースの使い分けに定評のある斎藤蓮でござります

てか姉御、今の鬼さん大丈夫か? すげえ勢いでぶつ飛んで行つた
けど…」

「陰口叩くだなんて鬼の風上にも置けない奴だからね

あれぐらい気にすることないさ、それよりも嫌な思いさせて悪か
つたね」

「まあ好き嫌いだなんて生きてればできるものなんだから仕方ないね
友達の悪口言つた奴がボコられてスカッとしたもの事実だけだな!
…いかん、こいしとさとりを待たせたままだ。

ちょっとダッシュで行つてくる「

「そりゃいけない、じゃあまたね。

今度会つたら美味しい酒期待してねよ」

「今度は酒蔵扱いですね、わかります」

「靈夢とこ姉御といい…

もてる男は大変である

「遅いよーん！遅いから私もおでん焼きたば食べしるよー。」

「何があつたのですか？」

「じめんじめん、ちょっと姉御に会つたからさ
状況説明めんどい！適当に心読んでくれい」

「…はい、把握しました。

……友達ですか」

「ん？ 何か言つた？」

「いえ、何でもあつませんよ。では待たせた罰として今度はこいつを
んの奢りで」

「こじもー」

「支払いは俺に任せること…バリバリッ」

「やめて……やめて『やめて』と言つてほしかったのですか?」

「ハンドフレですか?」

「そうですが、ではせつかくの縁日ですし早く回りましょ?」

「おーけい! それにしてもやとつ、今日は機嫌いいな、良い事あつた?」

「氣のせこですよ」

「おーけい! それにしてやとつ、が今もやとつだしこつもよつ笑つてる、確實

まあ美少女の笑顔はこの世の宝だしな、よしひ! 今日は心ゆくまでお祭りを楽しみました。

「「ホホホ、」のワシが…風邪をひくなぞ…ハーツクショイー…」

「安静にしろ、レン。今日はお前の仕事はお休みだ…こや、今日のお前の仕事は早く風邪を治すことだ。わかつたな？」

「つよーかい…ちくせう、生徒たちが…」

俺としたことが夏風邪を引いてしました。
まあアイス食いまくつてクーラーガンガンの部屋でひたひたして
いたらそれはなるわな、うん

「お粥を作つたぞ、食べれるか？」

「慧音がフウフウしながらあーんしてくれたら一瞬で風邪治つちゃ
うかも！」

「全くお前は元気なのかそうでないのか…私も時間が無いから少し
だけだぞ?」

「キターー!「ホホホッ!」

「大声を出すな!…お前のことは生徒として見た方がいいのかもし
れないな」

「男として見るといつ選択肢もありますぜ」

「ないないそれはない」

「（ 、 、 、 、 ）」

「ともかく、今日は大人しくしておくことだ
生徒たちが気になる気持ちもわかるが生徒に風邪をひくわけに
もいかないだろ？」「うう

「そりやねー」

「では行つてくれるよ」

お粥を残して慧音は帰つて行つた。
あーんをしてもらひつのを忘れたのは一生の不覚である

お昼も過ぎ、フランがお見舞いに来てくれた
授業が終わつたのだろう
…フランの後に青い服の子が見えた気がする

「レンツ！大丈夫？」

「大した風邪でもないし明日にはピンピンしてんだろうね
お見舞いありがとうねえ
それは置いといてだ…

きつ危険だッ！今の俺に近づくな！…クッ！体が熱い…
俺の風邪がうつる前に早く逃げるんだ！」

「元気そうだねー良かつた良かつた」

「今までずっと寝てたからな」

結構重要な事だが幻想郷の住人たちのスルースキルが上がってきて困る

「まあ冗談抜きに風邪うつるぞ？お見舞いに来ててくれた気持ちは嬉しいけども」

「私吸血鬼だし人間程度の病気だつたら効かないよ？」

「そりゃ安心だ、ところで後ろの子は誰だ？」

「あつ、入つてなかつたんだ…チルノ！入りなよー！」

「ふ…ふんーあたいは別にこの変な家にビビつてたわけじゃないだからね！」

変な家か…まあ改造を施した現代建築最先端技術（多分）の結晶
だからな

…ひるの？… チルノだと！？

「チルノ！チルノじゃないか！俺の友達から話は聞かせて貰つてゐるぜ！」

「え？私話したっけ？」

「うんにゃ、別の友達。幻想郷の外のな、結構有名だぞ」

「外で！？あたいのめーセーはそこまで広がつていただなんて…あたいつたらさいきょーね！どういう風に言われてるの？」

「え？…なんといつか……貞操に気をつけなさい」

「てーそー？」

「変な人について行っちゃ駄目つてこつた」

「チルノは俺の嫁！」 「「「少し頭冷やそつか…」」 「貴様らなにをするやめ！」

という争いを多く見てきているからな…

こいつは確実に外の世界に出しちゃいけないだろう
馬鹿キャラ…？らしいから口口口と騙されてしまいそうだ。

「ところでフランよ、チルノとは友達か？」

「うん！レンが『友達多い方が人生楽しい』って教えてくれたから
頑張ったよ！」

「フランガ幸セナラ……別……ぐふ」

「うーんレンって元気なの?風邪なの?」

「風邪だな、テンション上げたら頭フラフラしてきた……」

完全に自業自得である。

「そつか！ 風邪をひいたときは頭を冷やすといいつて聞いたからチルノにお願いしたんだー」

「色々な面でもそこさよーなあたいにまかせうー。」

：嫌な予感しかしない

たがフラン、チルノの無邪気な笑顔を見るとだな……

漢には避けてはならない道がある

俺は一足先に漢になつてくるぜ……！」

「 一 九 一 ！」

凍符「パーエクトフリーズ」

「うわああああー！チルノ！やつすぎだよー！」

「うわああああー！チルノ！やつすぎだよー！」

「え？ そつなの？… だいじょーぶ？」

「ふ… フフフ… とつ虎は何故強いと想つ？

「元々強いからよー」

「フハハ！ げつ 元気になつてきたぜー！」

「ありがとなー！ チルノ、 フラン」

「そつそつか、 よかつたよかつた」

「あたいはさーきょーなんだから温度ちょーセーもできて当然よー！」

そこから先はあまり覚えていないが帰るときのフランの顔は笑顔で
チルノの顔はどこか誇らしげだったことは覚えている。

… 今度花の慶次でも読んで漢を復習するか

「安静にじりと書つたのに… どうして風邪が悪化してるんだ？ お前

「

「こやあね… 今回の件は誰も悪くは無いこと畢つてんだ。そりしそう」

窓口まで元気なことで風邪を治しました

その22（後書き）

主のバイブルは「花の慶次」と「北斗の拳」
原哲夫さん大好きです

「おーす、レンこるかー？」

「魔理沙か、らっしゃい。何か用か？」

よくよく考えれば魔理沙が俺に用があつてぐるのは珍しい
いつも暇つぶしか飯食つか涼みに来るかの三択だからな

「私じゃなくてひじりんがお前に会つてみたいって言つから連れて
いく事にしたぜ」

「俺の意思を無視だと……」

「行くだろ？」

「無論

「じゅあ早速行け」

「また寺か」

命蓮寺といつも行かってきた

どうでもいいが幻想郷つてそこまで人いないのに神社多くね?
早苗さんが信仰集めに必死なのが少しわかつた気がする
そして靈夢、お前はもつちよつと信仰集めに精を出せ

「魔理沙ちゃんいらつしゃーー」

あらあら? そちら様が魔理沙ちゃんが話していた

「そうだぜ、コイツがレンだ」

流石幻想郷、またもやグラマラスでつまりおっぱいな美人さんでした。

そして髪の毛が…

「…地毛? 遊戯みてえ」

「えーと?」

「まあ言つた通り変な奴だ」

魔理沙のせいで俺の評価が最初から低い事に愕然とする

…いやプラス思考に考えるんだ

悪そうな人がちょっと良い事するとすぐ優しい人に見えるよつこ
マイナス評価からプラスになるとすくなく良く思われるつ…!
絶対値の定理つ…! すなわちギャップが存在すると…

「魔理沙アーグッジョブと言つておく…つてあれ? 魔理沙ビ…」
た?」

「魔理沙ちゃんならもう中に入つて行つちゃたわよ?」

「オウツーナンテ「ツッタイ」

人前で考え方なんてするものじゃないね

まずは適当に自己紹介から開始
ひじりんさんの本名は聖白蓮といい僧侶であり魔法使いらしい
それなんてドリゴンクエス（「ゆ

「まあ既にワタクシは賢者ですけどねー」

「あら？ 魔法が使えたの？」

「そういう意味ではなくてセイント的意味な感じ？」

「ビーハがセイントだ」

「うーー何といつか…己がリビドーをカタルシスした時になる状態だ
な」

「おーいレン、このままだと変人から変態にレベルアップするけど
いいのか？」

それは超えてはならない一線だと思つので自重することにした

「別に変態紳士だったらよかつたんだが変態教師はちょっとな…」

「どうして前者がいいのかわっぱり分からぬぜ」

「とりあえず今度魔理沙にクマ吉君について色々教える必要がありそうだ

「えーと…レン君、ちょっと聞きたい事があるのだけれどいいかしら?」

「いいですとも…」

「」で聖さんの結構真面目なお話が始まった
主に妖怪と人間の関係についてどう思っているか、どう在るべき
か…など

ちなみに魔理沙はどこかへ行つた、退屈だからだらう。

「うーん、妖怪とか人間とかあんまり考えないからな…
俺は妖怪に対して寿命長くていいなーぐらいしか思わないです、

ハイ

「それは本当ですか?」

「嘘だと思つならさとりを連れてきな!」

いや俺とそとりは友達だからな、連れてこようか?」

「覚と友達…妖怪と人間が友達…

す、素晴らしいです!

もしかして寺小屋に妖怪を招いているという噂も…

「噂つて…妖怪招いちや変なのか？」

「いえいえ…とても素晴らしい事です！人里の人から何か反応などは無かつたのですか？」

「ん~無かつたかな、村人たちが気付いた時にはフランも馴染んでいたし
もはや可愛がられてるぜ！同じ感じでこいしにもノーリアクションだったな」

あんな無邪氣で良い子達が可愛がないわけがない
一人でうんうん頷いていると聖さんから拍手が！
…良く見ると泣いてないか？

「少し知らない間に人間は変わっていたのですね…
寺にいたころと変わつていないと思つていましたが…
レンさん…あなたとお話出来て良かつたです」

そして「君」から「さん」に変わった

「聖さんや、俺の事は是非とも『レン君』と呼んでくれい
君付けで呼んでくれる人は貴重なんだ
そして最初みたいにもうちょっとフランクな口調でよろしく
さらに！俺はひじりんと呼んでも構いませんかねっ！」

「構わないわよ、レン君」

「レン君、魔理沙ちゃん…またいりつしゃいねー」

「ぱいぱーい…ひじりーん！」

日が沈む前には俺とひじりさんはずつかり仲良くなつてしましました
ヒヤ

そして何故かそれを笑う魔理沙

「どうして笑つてんだ？」

「いや、お前はホント誰とでもすぐに仲良くなるなと思つてな
その部分は素直に凄いと思つぜ」

魔理沙にしては珍しく普通にいい事を言つてくれた
だが俺は自重をしない漢！

「褒め言葉とな？ありがと
だが敢えて言おつ
フラグメイカーの魔理沙よ
お前が言うな」

「ほ、ほほつ、良に事言つてやつたのにその返しつて」とは

マスパを覚悟してると受け止めていいんだな?」

「Jの斎藤蓮がスペカやマスパを恐れて自重すると思っていたのか
アーネツー!」

「イイハナシダナーでは終わらせませんよ、ハイ

その23（後書き）

今回は命蓮寺ではひじりんしか会っていません
お客様が来るからとこいつことで

オチがひどいのなんの…

「涼しー… 大ちゃん、あたっこに住む

「ち、チルノちゃん駄目だよつ、迷惑だよ?」

「おーい、おつちゃんにスイカ貰つたんだが食つが?..」

「食べるー」

「えーと… いただきます」

家にチルノとその友達の妖精が遊びに来た。
フランに俺の家は夏でも涼しいと聞いて來たらしい
ちなみにチルノの友達の名は大ちゃんというそなうな

「ほれ、塩をくれてやろう
俺は掛けない派ですけどね!」

「あれ?このスイカ黒くて食べれないのがないよ?..」

「能力で消したからな」

やはり俺の能力は生きる上ではとても便利である
魚の鱗とか骨も消せるしな
魔理沙に見せたところ「能力の無駄遣いだぜ…」と言われた

「え~あたいそれをペペペッつとするの好きなのこ

「家中の中だからそんなことしちゃダメだよ…」

「あ、そっか…そこまで考えていただなんてアンタやるじゃない！」

「まあペペペシッとそれでいたらそれを外の世界の誰かにプレゼン…いやなんでもない。

…会話相手は無垢な子供たちだ、俺自重」

自分に言い聞かせる。

自己暗示をかけているとチルノが俺に話しかけてきた

「アンタの…て…

大ちゃん、なんだつけ？」

「寺小屋だよ」

「そつそつ…あたいと大ちゃんそれに行きたい！」

「い、行つていいですか？」

「いいですとも、今更生徒が一人増えようが二人増えようが関係ないだろ？

慧音に言つておくぜ、慧音つてのは一番偉い人だ、CEOつて奴だな」

「CEOって何？QEDみたいな感じ？」

「そんなノリだ」

自分で言つてて訳がわからないです、正直スマンかった
…しかし向こうから言つてくるとは予想外だつた。
それにしても

半人半獣の慧音

吸血鬼でありEXボスのフラン
フラン曰く同レベルの実力を持つこにし
自称最強のチルノ NEW!!

もう寺小屋の戦力がヤバい

俺はまだ見たことないが異変とやらが起きててもビリにでもなりそ
うだ

え？俺？俺はエリクサーで仲間を回復する要員ですよ

「よし…これでよーじは終わつたわね…

じゃあ……暑いからもうちょっとここに面る

「それじゃ帰れなくなつちやうよう、チルノちゃん」

「居るも帰るも自由にしてくれていいが俺は今から仕事があつてだな

仕事をする時はね、誰にも邪魔されず自由で…
なんというか…救われてなきゃあダメなんだ
独りで静かで豊かで…

という訳で邪魔はするなよ？絶対だぞ？

「わかった！」「はーい！」

実は斎藤蓮は教師である。

プリント作り、問題やホームルームで話すネタの考案…

こうみえて結構忙しいのだ。

という訳で奥の部屋でテスクワーカー開始この時だけは眞面目な斎藤蓮です

「大ちゃん、邪魔しに行こいっ！」

「だ、駄目だよっ！」

「これはネタ振りつてやつだよーーレンはまつと待つてるよーー

「そつなのかな…」

「そりだよー！」

「…うん」

それにしてもこの大ちゃん押しに弱い
乙女と言えない大ちゃんであった。

「おーい、レーンー！」

「どした？俺としては声のボリュームを少し落としてほし…」

「くひえー！」

チルノのれいとうビーム！
パソコンはこおりついた！
パソコンはがめんがまつくらになつた！

「……てやー！」

「痛つイイ！うでがあ

秘儀アームロック、俺の怒りが有頂天
これは教育的指導なり

「お、折れるうー」

「だ、ダメです！それ以上はいけない！」

「……」れぐらいにしとくか

チルノ、物事にはやつていい時と悪い時がある。
今学んだな？」

「うん……」めんなさい

「い、ごめんなさい」

何故か大ちゃんも謝る、連帶責任だと思つてゐるんだろうな……
チルノの顔からは反省している様子が窺える
パソコンを凍らせちゃったのは困つたが
俺もネタフリみたいな言い方しつちゃつたし……

俺も悪いな！これ結論

「な、う、ば、よ、し、 話、せ、る、」

…そして俺も変な言い方してごめんよ
…もう仕事なんてどうでもなれ、遊ぶか！」

「うそっ！ ああ、それがあの『まー』だ！」

仕事なんて無かつたんや！

その24（後書き）

テストなんて無かつたんや！

： ただの現実逃避です、ハイ

no25 (前書き)

珍しく一日連続投稿です
その代わりしばらくなはテストなどで忙しいため更新が遅くなります
○○○
申し訳ござります

「そうだ、日焼けしよ！」

そう思い立つたが吉田、幻想郷を飛び回ることにした。
夏が過ぎても肌が白い男ってのも嫌だからだ
適当に空を飛びまわっていると一面向日葵のエリアを発見！
クンカクンカ…これは危険そうな匂いッ！

「斎藤蓮、呐喊します！」

そりや行きますとも、いつものパターンですね

「「」」

降りて近くで見たら圧巻であった。

ひまわりひまわりひまわりまわりひわまりひまわり…
向日葵がゲシユタルト崩壊するぐらい咲いている
ボケーと見惚れていると背後から気配が

「「」」

「こんちは～…ふむ、またまた美人さんですなあ

「あら、ありがとう」

俺の目の前には赤いチェックのベストとスカートを着た緑髪のお

姉さんがいた。

もちろんナイスパーティである。幻想郷バンザイ
…今の状況と関係ないが肌がピリピリする、もう日焼けしたのだ
ろ？

「いや、まずは自己紹介だな、これぞ文化の基本法則
俺の名前は斎藤蓮だ、人里で教師をしてる」

「私は風見幽香よ、ねえ貴方

この一帯には危険な妖怪がいるんですって
早く帰つた方がいいかもね」

「なるほど…だから肌がピリピリするのか
ときにその危険な場所にいる風見さんはその妖怪を倒せるぐらい
強いとみた！」

「はずれよ、実はね私が…」

「いやいや眞まで言つた、分かったぜッ！
その危険な妖怪とやらは女好きで風見さんを襲わないとみた！」

「…違うわ、私がその妖怪なのよ」

「ナ、ナンダツテー」

「…貴方、私を馬鹿にしてる？」

「すみません、これが素です」

「ハア、なんだか調子が狂うわ」

初見の妖怪さえも困惑させる男、斎藤蓮ツ・
紫さん、勇戯の姉御、そして風見さん
お姉さん系妖怪は俺と喋つてると調子が狂う傾向があるよつだ
…しかしふと思つた

「あれ？俺ペンチじゃね？喰われる？」

「食べたりはしないわ
ちょっとといじめるだけよ」

「畜生ツ！M属性を身に付けておけばよかつた…
いや逆に考えるんだ、今日修得すればいいとつ…
わあ、ばつぱつーー！」

「」こんなに対応に困る獲物は初めてよ…

「さあ来いツ風見幽香ア！」

「今の俺はまだMじやないぞー！」

「…とりあえず一発殴るわ」

「うべー」

風見さんの鉄拳が俺の顔面に破裂

すごく…痛いです…

「前が見えねえ」

「え？めり込んだ？」

今殴った感触が奇妙だった気がするのだけれど…」

「何言つてるんですか風見さん、めり込むだなんて…
ファンタジーやメールヘンじゃないんですから」

「…貴方、人間よね？」

「一般人とかじゃなくて人間であることすら否定されかけてる…。」

「この事実にはショックを隠せない」

精神的ダメージを受けていると風見さんが傘を構えた
そしてエネルギーっぽいのが溜められていく
今の俺はスタートライトブレイカーを前にしたフェイントの気分だ

「もう面倒くさいから吹き飛ばすわ」

「む、花が危ないからちょっと待つて、移動する
…ああ、来いやあ！」

「……ハア、花妖怪の私が大切な向日葵を吹き飛ばす訳ないわよ
今日のところは見逃してあげるからさつさとどこかへ行きなさい」

「そうか、花妖怪だつたのか。

「だったら秋になつたら秋の花を見にまた来るよ」

「来るな」

怒りマークを付けた風見さんに笑顔で見送られた。また来るといふ

（オマケ）

「俺つて妖怪じゃなくて人間だよな？」と質問したところ

慧音「えつと……そうだな」

フラン「そういうえばそつだつたね」

「いし「やつぱり妖怪だつたの？」

魔理沙「どつちでもいいぜ」

靈夢「妖怪の方がしつくづくるわね」

「という訳でさ……紫さん、俺を人間にしてくれないか？」

「……気をしつかり持ちなさい、あなたは人間よ」

その26（前書き）

お久しぶりです

テストも終わって… そう、オワリましたね、ハイ
これからはちびちび更新出来ると思います

久しぶりに投稿したのに内容みじけえ…

今日は魔理沙ん家に遊びに行こう。

そう思い魔法の森を歩いていると…巨大なムカデに出会いました

「グハハ、こんなところにノコノコと食べられに来る馬鹿な人間が居ようとは……」

いやいや、やつと見た目も妖怪って言えるのではなかつたぜー。」

「そ、そつか…」

ちょっと感激したのドンショ 上げたらマカトをこじら
きされたで」「わる
見た感じ大きさは全長5メートルぐらい、そして喋る、やつ喋る、
これ重要。

「ところでムカデさんの名前って何だ? タイラン・トワームとか?」

「いやワシは日本生まれだから横文字の名前じゃないんじゃが…それに名前も何もワシは大ムカデ、それ以上でも以下でもない」

「いや待て、ドラクエ2でムカデ系の敵がいたはずだ…

う！

「おお、何か強そうじやね？」

「だから何で横文字の名前なんじゃ！ワシは大ムカデじゃと言つと
るに…

…もう面倒くさいしコイツを食つてしまえり「マスター・スパーク
！」チヴァアア！」

「む、ムカデ…！」

ありのままに起こつた事を話すぜ…

大ムカデと喋つたら大ムカデが光に包まれて消滅していた…
弾幕とかそんなチャチなモンじゃ断じてねえ！
この恐ろしい物の片鱗を味わつたことは結構あるぜ…

「ままま魔理沙ア！なにするだーー！」

「なな、なんだ？お前襲われてたんじやないのか？」

「喋つてた」

「…なんでだよ、こここの妖怪つて凶暴なはずなんだが…」

…地靈殿でも似たような事言われた気がする

「まあ助けてくれたのは嬉しいので…ありがとうな
そしてヘルピートに黙祷を捧げよう」

「あれ？この大ムカデに名前あつたのか？」

「俺がさつき付けた、本人は満更でもなかつたっぽい」

「嘘だな」

「何故ばれたし」

「日本の妖怪なのに横文字の名前ってのがおかしいぜ
レン、お前の名前は今日からトムだって言われて嬉しいか？」

「トムクルーズだつたら…それでも嫌だな、正直スマンかった
…ああそうだ、今から魔理沙ん家に遊びに行つていい？」

「それで森にいたのか、いいぜ
ただし昼飯作れよな！」

「フッフッフ、口からマスパが出るぐらい美味しい料理を食わせてや
るわ。味皇みたいに！」

「どんなりアクションだよ」と魔理沙と雑談しながら家へと向か
う。

「こんな感じが俺の口常つてやつです、ハイ

その27（前書き）

第8回東方キャラ人気投票が終わりましたね
作者はもちろんお空ちゃんに投票！… するつもりでしたが
あ… ありのまま起じたことを話すぜ

『俺はお空に投票したと思っていたらさとうに投票していた
な… なにをいつてるのかわからねーと（「ヨ

ゲームによつては最大体力が満タンの時に回復アイテムを使つと最大値が上がつたりするものがある。

例を挙げると風来のシレンで満腹時におにぎりを食つ、薬草を使うなどがそうだ

俺はそういう風に魔力が増えると信じ、毎朝エリクサーを飲み続けた。

その結果…

「俺の魔力が若干増えてスペカが作れそうになつたのだっ！」
慧音曰くEASYぐらいの弾幕になるそつだけね～

「おめでとうござります。レンさんが一人で地靈殿に来るのも少しは安心できますね」

そう、俺がいるのは地靈殿で話し相手はひとりである。

「元々危険な田に会つたことなど無いつて、ひとりでできるもん…」
ところでだ、スペカについて相談したいんだけど、いい？」

「いいですけど、それなら靈夢や魔理沙が適任では？」

「いや、駄目だ。あいつらは俺が弾幕ごっこでひと泡吹かせたいから俺がスペカ使えることは秘密だな。

後さとりつて相手の心読んでトライウマなスペカ使えるつて前言つてたじさん

だから強いスペカ色々知つてそつだなーつと思つた

「いや、駄目だ。あいつらは俺が弾幕ごっこでひと泡吹かせたいから俺がスペカ使えることは秘密だな。

後さとりつて相手の心読んでトライウマなスペカ使えるつて前言つてたじさん

だから強いスペカ色々知つてそつだなーつと思つた

「そこまで知っている訳ではないのですが…」

「一人でうんうん唸つていると背後に気配が、多分こいしだな。…わとりが言つには気配も感じないはずらしいですけどね

「ハイハイハイ…」レノの相談相手になつてあげる…」

「EXボスキタツ！これで勝つる！」

そこからはもはやスーパー雑談タイム突入、相談ではなく雑談です。

「とりあえず靈夢も魔理沙も人間かどうか疑われるぐらい強いらしいな…どうしたものか

「でも正直靈夢なら『』にかなりそうな気がする
能力でお金とか食糧ばらまけば自分から当たるに…」

「うーん…靈夢ならそれを確保しつつレノに勝つと思つよ

「むしろ『食べ物を粗末にするな…』と靈夢の逆鱗に触れてしまつかも」

「うん、この作戦は無かつた事にしよう」

オチが想像出来たのでこれは却下した、泣いても殴られ続けるのはもう嫌です。

…考えていると俺にはもう一つのチート能力があつた事を思い出した

「そりだ！俺のこの世に存在する物を消す程度の能力×で符とか針とか消せばいいじゃん！」

「弾幕一つ一つにそこまで靈力使わないだろ？し多分消せる！…あんまり使わない能力だから忘れてたわ」

「な、なかなか出鱈目な能力ですね…」

「へえーそんな能力も持つてたんだーすごいね！レンツ！でもどう攻めるの？」

「それはね…どうするべ…」

「レンレン！私に良い考えがある！」

「フランちゃんの時みたいに私がスペカ使えばいいんだよ！」

「これは来ましたね、勝たせてもらいましたね
靈夢！首を洗つて待つてろよ！フハハ、死ぬが良い！」

チート能力ツッ！エリクサーツ！フフフフフフツ
EXボスのスペカツ！フハハハハハハ

「これで何物もこの斎藤蓮を超える者がいないと証明されるぞッ！
我が「助つ人」の「力」のもとにひれ伏すがいいぞッ！」

「レンさん、思つてること口から漏れていますよ？」

「こうして打倒靈夢計画は実行へと移つた！
え？ フラグ？ つるせえ！ 言つた奴は表出ろ

そして翌日、靈夢に挑戦状を叩きつけられた戦である…
…その結果が だよ…

「オラオラオラ…むちむち落ちなやこ…」

「ちよ、なして靈夢はあインフライトなんだよお…
スペカはまじうしたああ…！」

靈夢は執拗なまでにお祓い棒で殴ってきた。
いつなつたら背負つていのこにしにスペカを使つてもひつ余裕も
ない
一重結界（EASY）とやらを能力で完封した後ドヤ顔したのが
不味かつたか…

「 もう…逃げるの…限界…！」お前だけも逃げるんやー…
…また今度地靈殿に遊びに行くから…

せとりに美味しい紅茶を楽しみにしてるひと言つとおこしてくれ

「れ、レンー…」

「へへッ、やつぱ俺つて…不可能を…可能に…グボア…」

「ふう、すつきつしたわ」

俺をボコボコにしておいて清々しい顔している靈夢マジ鬼巫女
しみじみ思いながら俺は意識を失った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8154n/>

幻想入りしたので普通に生活してみることにした

2011年2月22日06時31分発行